千坂の歴史は弥生・古墳時代から

プロローグ

千坂公民館は文化事業の一環として、１９９４（平成６）年８月に「千坂の歴史を語る会」を発足した。

当時、北陸新幹線の着工により、千坂地区では平成１２年から高架化工事が着々と進捗。通過地域の百坂、横枕、法光寺、柳橋町内で蓮根田、田んぼのほか住宅、事業所の２３軒が移転を余儀なくされ、昔からの風景があっと言う間に壊されていくのを目の当たりにする。

「歴史に目を閉ざすものは、将来が分からなくなる」と、ドイツのある大統領の言葉が脳裏にある。新しい時代の波に押され、先人たちが歩んできた地域の姿や歴史を、今に止めて置かねば、１０年、２０年後には、そこに何があったのかさえ分からなくなるのではとの危惧があり、公民館の大事な事業として「語る会」をスタートしたのである。

千坂校下に古くから住む６０歳以上の方たちに参加を呼びかけた。予想をはるかに超える４０名近くが集まり、自分たちが子供の頃に体験したこと、両親から聞いた話、さらに祖父母を通じ語り継がれていることなどを語り合った。回を重ねるごとに知られざる千坂の地域が浮き彫りされてきて、貴重な一言、一言であることを痛感する。座談だけで終わらせてはもったいないと、多くの人達からの声が寄せられ、座談の内容を将来への記録として止めようと、「千坂の歴史あれこれ談議」の小冊子を発刊した。

語られた事柄が多岐にわたり、遺跡、史跡、神社、寺院跡、民俗伝承、生活文化など幅広い内容として纏めることが出来た。

千坂公民館発足５０周年、半世紀の歳月は流れている。これを機会に、語り合われた事柄と千坂に関するその他の資料を合わせ、「千坂の歩み」の１ページに記録することにした。

千坂校下の変遷

今も昔も変わらぬ金沢市北部の玄関口である。藩政時代、江戸へと続いた北国街道の町並みが、現在も柳橋町、法光寺町、百坂町の一部で面影を残し、その頃、参勤交代の行列が華々しく通った情景が彷彿と浮かび上がる。

この街道筋は、現在、国道８号、３５９号、３０４号線が交わり、富山県、能登方面への出入り口となっている。

千坂校下の人口は年々増加、今は１１，３７５人、世帯数４，３１０（平成１８年７月現在）を数え、金沢市では人口において９番目となり規模の大きい地域として発展している。さらに地域内では北陸新幹線高架化工事が平成２７年の開通を目指し着々と進められ、地域が大きく変貌しつつある。

こうした地域形成の過程では、市街地とは異なり、町村合併の歴史を刻みながら「千坂」が誕生していることを、まず初めに記しておきたい。

◆河北郡の一地域

千坂地域は藩政時代から河北郡の一地域として行政が行われてきたが、明治中期の１８８８（明治２１）年４月、町村制が施行されると同時に、町村合併の機運が高まり、同２２年４月には、河北郡内の２６８ヶ村が１町３３村に整理された。この時に後年、小坂村の基盤となる小金村、坂井村、金川村、中口村の４村が誕生した。その当時はまだ河北郡の行政区域である。因みに千坂の地域母体となった坂井、金川両村の人口、戸数は次の通り。

《坂井村》

神谷内村	４０１人	９４戸	柳橋村	１０４人	２４戸
横枕村	１０８人	２２戸	法光寺村	１０６人	２０戸
百坂村	１１７人	３１戸	金市新保村	５９人	１３戸
新保荒屋村	４４人	１２戸	福久村	６０４人	１２８戸

《金川村》

宮保村	１９０人	３８戸	疋田村	１４４人	２４戸
千田村	１８９人	３５戸	今村	６０人	１３戸
千木村	４０７人	８８戸			

この４村時代は約１８年間続いたが１９０７（明治４０）年、国の施策として再び町村の統廃合が推進され、４ヶ村が合併して小坂村となっている。村名は古くからこの地域が小坂庄と呼ばれていたことから名づけられている。

合併では面積が広く、部落数が多いことが重なって、なかなか初代村長が決まらず、一時期、県役人が任命されたり、一方、村会議員選挙では合併の賛成派、反対派が対立、候補者を土蔵に拘束したりする騒ぎが起きている。合併は苦難の道のりを踏み越えての歴史が刻まれている。

◆昭和１１年、金沢市に合併

こうした長年の歳月と変遷を辿りつつ、金沢市の都市計画推進に呼応し、１９３６（昭和１１）年４月、金沢市に編入する。明治２２年４月、４ヶ村が生まれてから４７年目、小坂村が発足して３０年の歩みを経て村制を解消。金沢市の北部玄関口として位置づけられた。

しかし、千坂校下がスタートするまでには、この後も小坂地区の行政区域となっていた。

当時、今の千坂地域内に千木小学校、百坂小学校の二つの学校があった。早くから両校を一つにとの声が出されていたが、実現を見ぬままになっていた。

ところが１９５２（昭和２７）年７月１日午前８時２０分、百坂小学校の裏山が豪雨でがけ崩れに巻き込まれて倒壊した。このことがきっかけで急速に統合の機運が高まり、翌２８年１１月、両校が合併して現在地（千木１丁目）に建てられた。この統合でも千木、百坂地区との間では、場所の選定に綱引きがあったが、千木と百坂の校名を生かし、「千坂小学校」となっている。

この統合を機に元の坂井村、金川村の１３村を母胎に、小坂地区から分離して千坂地区が

誕生している。

その後、旧村周辺の道路、河川が整備され、土地区画整理の進展、新興住宅地の造成が急速に進み、商業地域も形成されて、平成６年には人口が１万人を突破。２３町会を擁する大きな地区として発展を遂げている。

この間の人口の推移を見ると

	人　　口	世　　帯
昭年３０年	２，０４９	３９９
昭和４０年	３，７１９	８０６
昭和５０年	６，７２５	１，７２３
昭和６０年	８，４６８	２，４７６
平成　２年	９，１６７	２，７３０
平成１０年	１０，８７１	３，７９９
平成１８年	１１，３７５	４，３１０

千坂校下の歴史探訪

先に述べている「千坂の歴史を語る会」で語り合われた事柄を、遺跡、史跡、神社、寺院跡、生業（なりわい)、生活文化、環境などの項目にまとめ、その他の参考資料を加え「千坂校下の歴史探訪」として紹介する。

《遺跡》

千坂の歴史は弥生・古墳時代から

この項では今は形を止めていないが、発掘調査で発見された遺跡、伝説となっている史跡、寺院跡を紹介する。

◆千木ヤシキダ遺跡＝千木１丁目、疋田３丁目

遺跡は千木１丁目、疋田３丁目に続く広い範囲にある。昭和５９年９月、北陸自動車道路の工事と並行し、疋田土地区画整理事業が進められ、同６３年、平成元年、同２年の４次に亘る発掘調査で発見された。道路と周辺の水田から６世紀初めの土器や銅銭、９世紀代の掘っ立て式の建物跡が発見された。

このあたりは古くから通称ヤシキダと呼ばれている地域で、地名については漢字はなく、なぜヤシキダと言い伝えられているのかは分からない。遺跡の発見により、通称のヤシキダという名前から、屋敷があったのではと推測されている。

このヤシキダ遺跡近くにある田んぼや現在、建物が建っている場所では、アブラダ、アカ

ダ、ツチダ、カミフカダ、コウラダ、スナダ、フルザンマイ、アマヅクリ、ナカバサ、タケハナ、アカシなどの地名が伝えられ、今でもお年寄りの間では昔からの名前で呼ばれ通用している。

発掘された遺構面は３層に分かれていて、上層が平安時代、真ん中が飛鳥時代（７世紀前半）下の部分が古墳時代後期（６世紀前半）であるとされている。

発掘された建物跡はいずれも掘っ立て式で、２７棟が発見され、そのうち時期が判明しているのは９世紀代が９棟、１０世紀代が１２棟、１１世紀代が２棟で、２つの集落に分かれていたことが証明されている。

出土した大量の銅銭、陶磁器の中で、注目さているのは、建物柱跡で大量の壊れた土器が発見されている。復元できるものが多く、１６４点を数えている。使用頻度の低いもので、祭祀用土器が一括して廃棄し埋められたのではないかとみられている。また地鎮祭祀遺構から多く発見される皇朝銭７８枚が出ていることなどから、調査報告書では陰陽思想に明るく、祭祀に敏感な階層・出自の人によって造成されたのではと推察されている。さらに遺跡の性格について、９世紀代に中枢部から離れていて、さほど目立たない存在でありながら、内水面の交通、流通を担い、その経済活動を通じて成長を遂げた新興の中規模首長勢力の拠点だったのではと想定している。

遺跡の場所は河北潟へは約３．５ｋｍの距離にあり、こうした観点からも、地元では納得できる遺跡であると受け止めている。

なお出土した大量の銅銭、陶磁器は金沢市埋蔵文化財保護センターに収蔵され、建物跡の規模からして石川県内屈指の遺跡ではないかと注目されている。

一方、遺跡とは関係のない発見がある。北東から南西方向に向け噴出した砂の層が見つかり、地震の痕跡を示すものとされ、近くの森本断層と並行している場所でもあり地震跡と推定されていることを付記する。

千木ヤシキダ遺跡の現光景　千木１丁目、疋田３丁目

◆千田遺跡＝千田町

第１章　位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

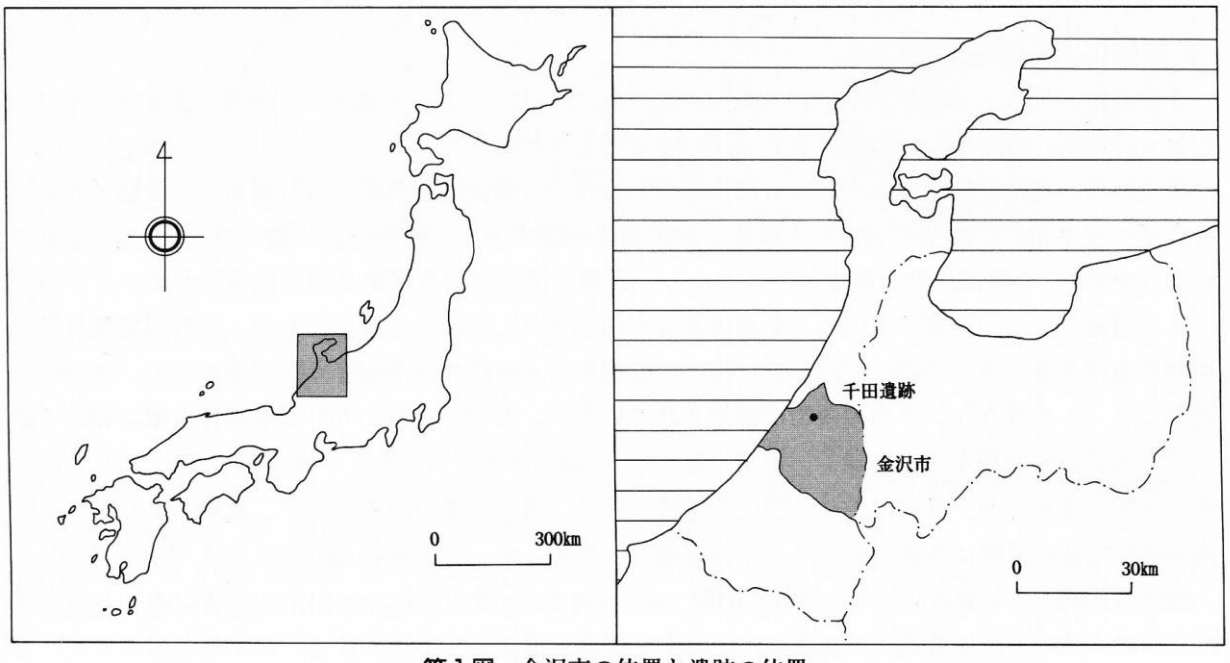
千田遺跡は、石川県金沢市千田町地内に所在する遺跡である。石川県は、旧国名では北の能登国と南の加賀国からなる南北に細長い県である。石川県の地理的形状は東西方向に狭く、南北方向約１６０ｋｍで、南西は福井県、南東は岐阜県、東は富山県にそれぞれ接している。金沢市は、加賀国の北部で石川県のほぼ中央やや南に位置し、その中心地区は、東の山間部から伸びた台地の麓にあり、山間部に源を発し、台地を挟むように西流する２本の川の間に広がっている。一つは日本海に注ぐ南の犀川、もう一つは河北潟に注ぐ北の浅野川である。

金沢市北部の千田遺跡は浅野川の北、中心街から約６ｋｍ北に位置し、国道８号線田中交差点から能登有料道路へつながる県道向粟崎・安江線が金腐川に架かる田中橋の周辺に広がる。また、河北潟へは北に約４ｋｍ、日本海へは北西に約４．５ｋｍで、遺構面は海抜高度で約１ｍである。

金沢市域の地形は、東方は森本丘陵および加越山地で、そこから北西方向に平野部が広がり、北東から南西方向に単調に延びる海岸線の日本海に面する。平野部は犀川･伏見川を境に北部平野と南部平野に二分される。

北部平野の大部分は犀川・浅野川により形成された沖積平野で、粘土質の強い地質である。南部平野は白山に源を発する石川県最大河川である手取川が形成した扇状地の北辺で、砂質の強いシルト層の地質である。地質的に二分される北部平野は、地理的にはさらに浅野川により西部と北部に二分される。つまり、金沢の平野部については犀川以南の南部平野、犀川と浅野川の間の西部平野、浅野川以北の北部平野に大きく三分できる。

北部平野に所在する千田遺跡周辺は粘土質が強く水捌けが悪く、下流では天井川となる浅野川･金腐川の流域で、河北潟もかつては広く、海に面した立地であり、かつては水害の



第１図　金沢市の位置と遺跡の位置

多い地域でもあった。 なお、金腐川は遺跡分布範囲の上に天井川として流れている。

第２節　周辺の遺跡と歴史的環境

（１）金沢平野の弥生･古墳時代の遺跡（第２図）

弥生時代になると沖積地にも人々は進出し生活を営む。前期では戸水Ｃ遺跡から遠賀川系の甕が出土し、そのほか畝田・下安原海岸遺跡からも前期の土器が確認されているが、質・量とも多くはなく海岸近の低湿地に散在している状況である。

中期前葉になると矢木ジワリ遺跡、下安原遺跡、中屋ヘシタ遺跡など犀川以南の南部平野で土器を定量確認できる遺跡が現れる。中葉では寺中遺跡･上荒屋遺跡.磯部運動公園遺跡など南部･西部･北部平野にそれぞれ現れる。何れも短期的な遺跡がほとんどであるが、寺中遺跡周辺は拠点集落となる可能性がある。中期後葉になると遺跡が急増する。短期的なものでは中期後葉の標識遺跡である磯部運動公園遺跡、専光寺養魚場遺跡、中期末の標識遺跡である戸水Ｂ遺跡、上安原遺跡などがあり、金沢平野での拠点集落といえる西念･南新保遺跡もこの頃（中期後葉）から始まり、古墳時代初頭まで存続する。

後期前半では、西念･南新保遺跡の他は中期後葉からの遺跡は途絶え減少する。短期的なもので、上安原遺跡、桜田･示野中遺跡、藤江Ｃ遺跡、ニロ町遺跡などがある。後期後半になると遺跡は再び増大する。平野部の無量寺Ｂ遺跡などの他、丘陵部でも塚崎遺跡や七ツ塚墳墓群、神谷内Ａ遺跡などで確認できる。

弥生時代終末の遺跡は明確ではない。月影遺跡に代表されるが、西念･南新保遺跡でも減少している時期で、近岡ナカシマ遺跡や野々市町の御経塚ツカダ遺跡等がある。

古墳時代前期は金沢の平野部で最も遺跡が多い時期である。古墳では丘陵部では神谷内古墳群、平野部では戸水Ｃ古墳群が調査されている。標式となっている集落遺跡は中期まで存続する古府クルビ遺跡や高畠遺跡がある。中期になると遺跡は減少する。古墳では小坂古墳群や北塚古墳群が調査されている。集落では、上荒屋遺跡や沖町遺跡.田中Ｂ遺跡などがある。

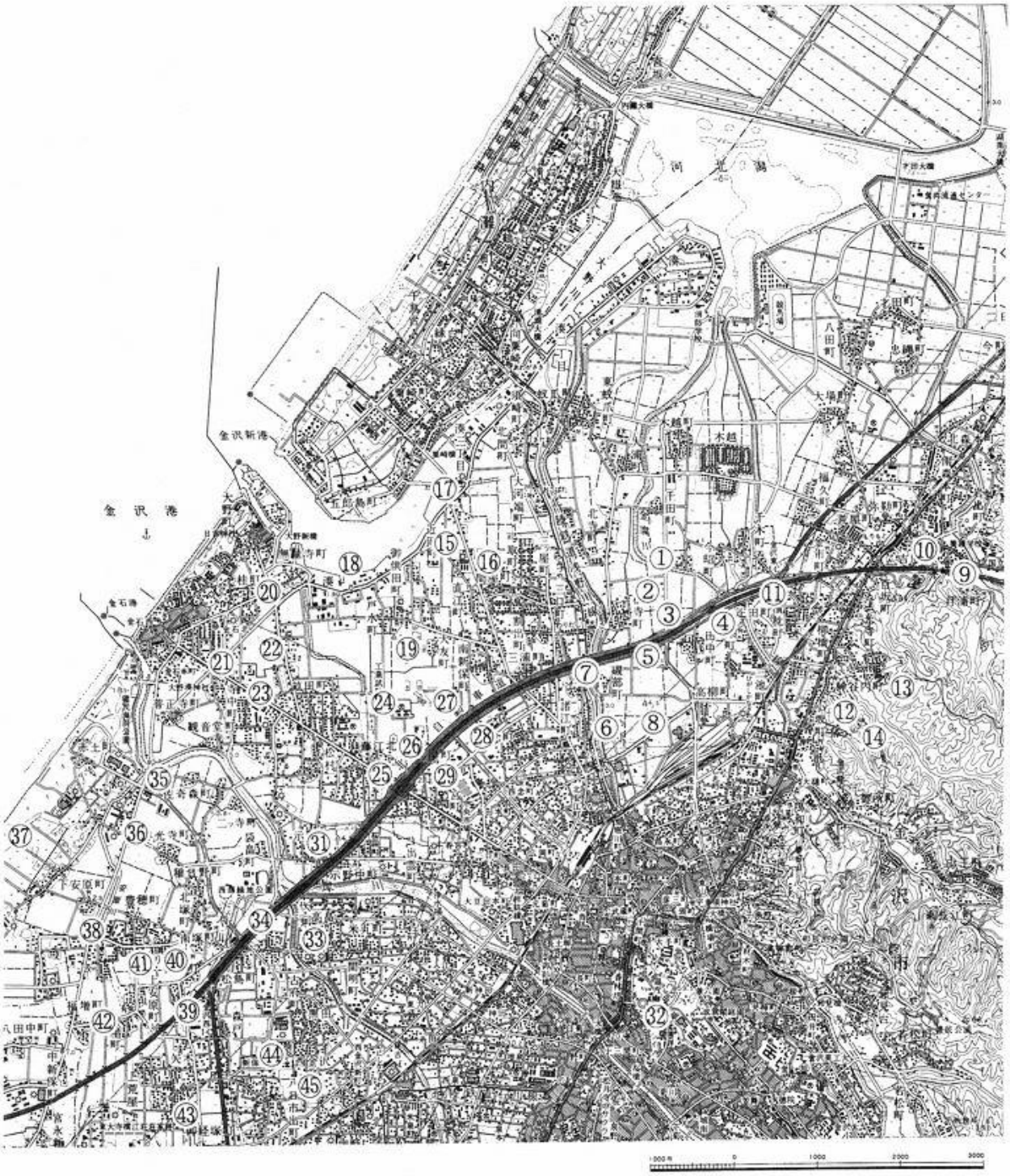
千田遺跡は、弥生時代中期後葉に始まり、後期前半は確認できないが、後期後半から古墳時代中期初めまで存続する遺跡で、西念･南新保遺跡とは異なった拠点集落といえる。

（２）浅野川以北の遺跡（第３図）

千田遺跡が所在する浅野川以北の北部平野についてみていくと丘陵部から潟（海）部方向に伸びた何本もの細長い微高地上に遺跡が分布していると考えられる。

縄文時代の遺構が確認されたのは、磯部東遺跡のみで、縄文晩期の溝と土器溜まりが確認されている。その後本格的に集落が営まれるのは、弥生時代中期である。弥生時代中期中葉（小松式）および後葉（磯部式）の磯部運動公園遺跡からである。周溝を伴う竪穴系建物と掘立柱建物がセットで確認できる遺跡である。中期中葉頃の方形周溝墓群が確認されたのは松寺遺跡である。方形周溝墓以外で中期の遺構と考えられるのは周溝墓群に接して位置する６本柱の周溝を伴う竪穴系建物で、中央に松菊里型ビットを伴うが、中期の遺物は確認されていない。したがって、方形周溝墓に供献された土器のみであるため時期を決定し難く、後葉（磯部式）に降る可能性もある。中期末葉（戸水Ｃ式）では、今では松

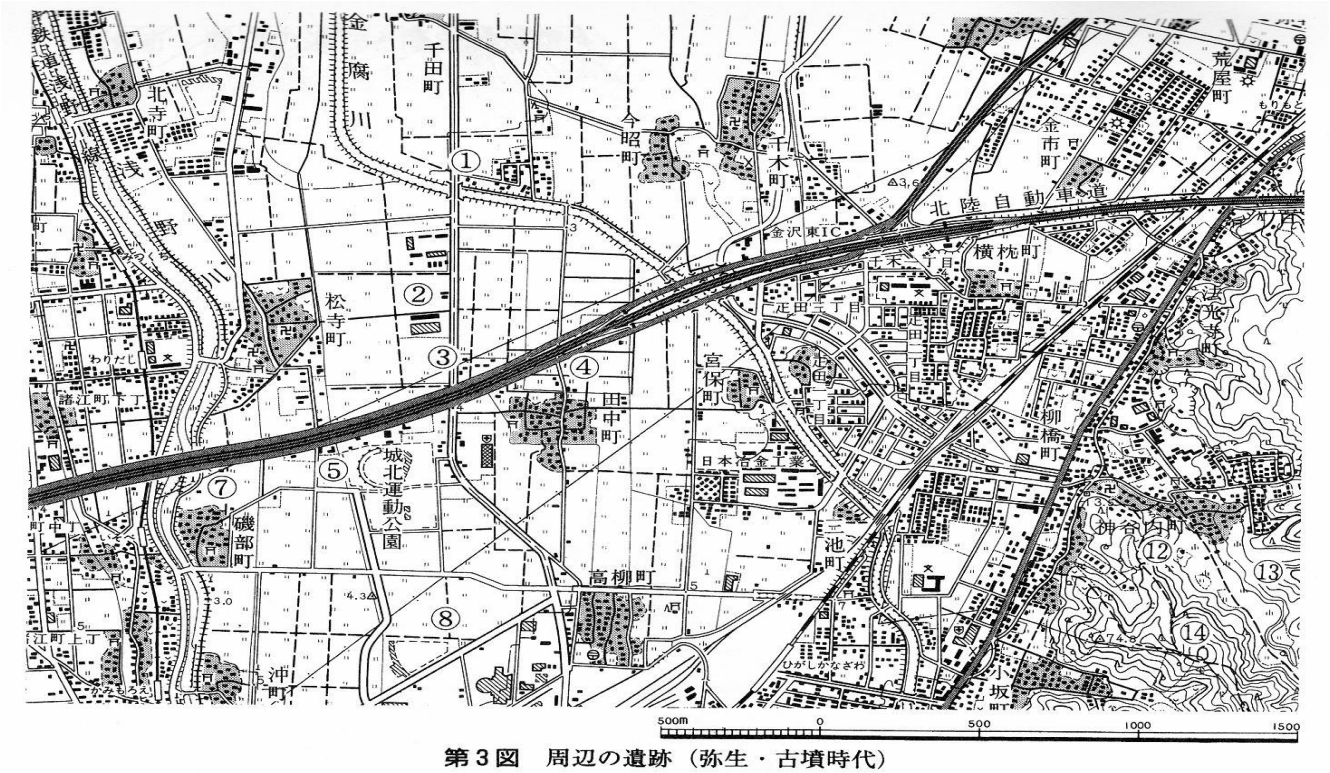
寺遺跡と同一遺跡とされる田中Ａ遺跡がある。遺構は溝のみであるが、定量出土している。弥生時代後期の遺跡は本書で報告する千田遺跡のみであるが、後期後半（法仏式）が主で前半はない。



弥生から古墳時代中期の遺跡

1. 千田遺跡　2. 松寺遺跡　3. 田中A遺跡　4. 田中B遺跡　5. 磯部運動公園遺跡　6. 磯部カンダ遺跡　7. 磯部東遺跡　8. 沖町遺跡
9. 塚崎遺跡　10. 七ツ塚墳墓群　11. 千木ヤシキダ遺跡　12. 神谷内A遺跡　13. 神谷内古墳群　14. 小坂古墳群
15. 近岡ナカシマ遺跡　16. 近岡テラダ遺跡　17. 近岡遺跡　18. 戸水C遺跡・戸水C古墳群　19. 大友西遺跡　20. 無量寺B遺跡
21. 寺中遺跡　22. 畝田遺跡　23. 畝田・寺中遺跡　24. 戸水B遺跡　25. 藤江B遺跡　26. 藤江C遺跡　27. 南新保三枚田遺跡
28. 西念・南新保遺跡　29. 二口六丁遺跡　30. 二口町遺跡　31. 桜田・示野中遺跡　32. 広坂遺跡
33. 高畠遺跡　34. 古府クルビ遺跡　35. 佐奇森遺跡　36. 専光寺養魚場遺跡　37. 下安原海岸遺跡　38. 下安原遺跡　39. 矢木ジワリ遺跡　40. 神野遺跡　41. 上安原遺跡　42. 中屋ヘシタ遺跡　43. 上荒屋遺跡　44. 新保本町西遺跡　45. 新保本町東遺跡

第2図　金沢市の遺跡（弥生・古墳時代）



第３図　周辺の遺跡（弥生・古墳時代）

弥生時代終末（月影式）から古墳時代前期（白江～高畠式）までは松寺･ 田中Ａ遺跡がある。松寺遺跡では終末期の方形周溝墓が確認されているが、遺構・遺物とも少なくはないが主体とはならず、主体は古墳時代前期である。松寺遺跡では布掘り６棟を含む掘立柱建物３５棟、竪穴（系）建物５棟のほとんどはこの時期のものである。なお、田中Ａ遺跡からは重圏文鏡が確認されている。

それに続く高畠～宮地式の遺跡が沖町遺跡である。周溝を伴う竪穴系建物（方形溝内に１棟の逮物）の延長で考えられるものと複数の掘立柱建物群を取り囲む方形の溝（一辺１５ｍ前後）が確認された遺跡で、溝から良好な遺物が確認されている。田中Ｂ遺跡は沖町に時期的に後続する遺跡で、遺構は明確ではないが、凹地から須恵器写しの腺のほか祭祀関連の土器や土製支脚を含む大量かつ良好な逍 物が確認されている。古墳時代後期では平安時代の官衙関連遺跡として有名な千木ヤシキダ遺跡の下 層から６世紀中葉の遺物を含む層が確認されてい る 。

一方、丘陵部では弥生後期後半の塚崎遺跡や七ツ塚墳墓群.神谷内Ａ遺跡等があるが平野部同様後期前半はない。前・中期古墳では、古墳時代前期の神谷内１２号墳等と、中期初の小坂古１号墳がある。

神谷内１２号墳は直径約２２ｍの円墳に約５ｍの前方部が付く。前方部周辺から古墳時代前期の壺･高坏･ 器台が出土し、主体部からは中国鏡の可能性が高い内行花文鏡等が確認されている。小坂古墳群は前期に築造が始まり中期主体の古墳群と考えられ、その盟主墳である小坂１号墳は、５世紀前葉頃の築造とされる直径約２５ｍの円墳である。第１主体部からは碧玉製の紡錘車、刃部に３段の腸抉を持つ 鉄鍬、４４ｃｍの鉄剣などが確認されている。

以下、略

参考文献：石川県金沢市　千田遺跡　２００２（平成１４）年３月

金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）編から抜粋

《史跡》

◆加寿神社跡（かすが）＝福久町

福久町にあるショッピングセンター・金沢サティ裏側の一角に、加寿神社跡と刻んだ石碑が建っている。昭和３年、昭和天皇の即位を記念し、青年団が発起人となって建てたと記されている。神社跡を示す唯一の証しとなっている。 地元に伝えられている話には、金沢城主前田利家の命により、天正１４年５月、河北郡内灘町にある小浜神社境内の摂末社数１０社の再興整理が行われ、そのうちの１社のご神体が同町の瓊瓊杵神社に移された。大正５年になって同神ににぎ社の近くにあった加寿神社が合祀されている。これについて経緯を記した記録や資料はなく、「語る会の集い」でも確かなことは把握できなかった。

ただ同町には天正１４年から大正５年まで、２つの氏神様があったことは確かで、１つの村落に２つの神社が存在していたことは珍しいことである。

これに関連してか、同町に住む高齢の人達は、今でも瓊瓊杵神社側を「かみで」、加寿神社側を「しもで」と呼称しており、因みに瓊瓊杵神社に２つの獅子頭が保存されている。この獅子については別項で述べる。

加寿神社の跡地は瓊瓊杵神社から約１．５ｋｍ離れた大場町寄りの田んぼの中にあったが、平成１２年４月、大型スーパー・金沢サティの進出で、駐車場に変わっている。それまでは樹木一本もない荒地の状態で残っていた。

こうして跡形もなくなった神社だが、古老の間では、境内の周囲は生い茂った竹藪で、祭礼の際に藪の整備で竹を切り払っていた。子どもたちはその切り株の間を飛び回って遊んでいたが、怪我一つしない不思議な竹林だったと伝えている。また祭礼の行事で大鉢に盛った酒で顔を洗う奇習があったとも語り継がれている。

久町）

◆金戸（かねと）の井戸＝福久町

この加寿神社跡地の片隅に「金戸の井戸」と呼ばれ、地下水の湧き出た井戸が残っている。昭和２０年までの戦時中、この井戸の水を飲み戦場へ出ても弾丸に当たらないと言われ、出征する近郊の人や息子に飲ませたいと、遠くからもきて武運を祈る姿が見られたと、同町に住むＡさんがしみじみと回顧する。

実際に横枕町に住むＹさんは、この水を瓶に詰め、出征した戦場で砲弾が炸裂、ポケットに入れていた瓶は割れたが、かすり傷ひとつ負わなかったと、当時の状況を思い出しつつ、そのあらたかさを熱っぽく語っている。井戸の名称は土地の名から付けられたものである、現在は整備された金沢サティ駐車場の一角に、歴史の証しとして保存されている。井戸をのぞくと枯れた状態の奥深い底を見ることができる。

福久町）

◆一向一揆の寺院群跡＝木越町

今から４００年余を遡る室町時代後期、戦国武将が覇を競う中にあって、真宗本願寺派の宗徒達は教線拡大で結束。北陸の寺院と提携し「加賀は百姓の持ちたる国」と言われる真宗王国を築いた。１００年余の長期に亘り、中央政権と対立。特異な宗教活動を展開した。

宗門集団は一向宗と呼ばれ、蓮如上人の教えがエネルギーの支えになっている。「一向一揆」
を旗印とした活動は、当時の守護国主も手を焼く存在で勢威を誇っていた。

◇織田信長の弾圧で滅亡

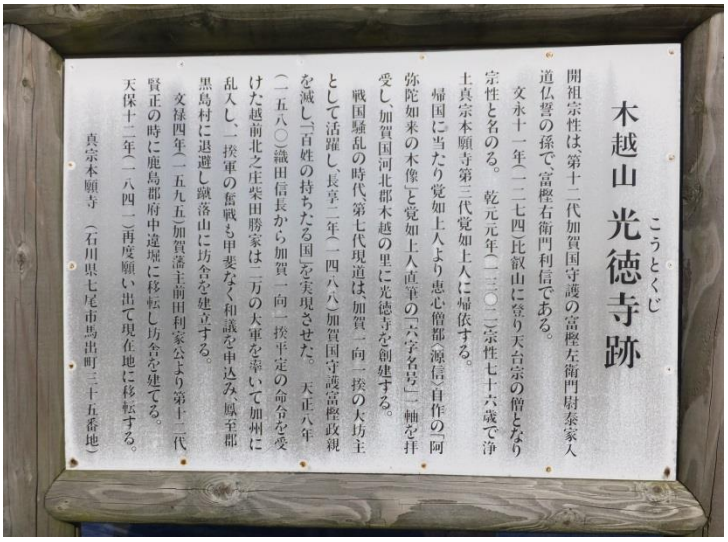
「天下布武」を掲げる織田信長にとって宗徒達は目の上の瘤であり、このため強引な宗教弾圧を行っていた。大坂の石山本願寺と１０年余の対立を続け、「石山合戦」最後の年、石山に次ぐ規模を持つ本願寺別院・金沢御堂にも織田軍勢の矛先が向けられ、柴田勝家の武将佐久間盛政が攻め入った。

木越町にはこの御堂を支える光徳寺、光琳寺、光専寺の三寺院があり、木越三光と呼ばれ一向宗の拠点として勢威を誇っていた。

千田町に住むＡさんの案内で、寺院があった場所を訪ねた。千田町にある八坂神社（天狗の森）から見て木越町一帯の田園の中に、大小１８の支坊を持つ光琳寺を中心に光徳寺、光専寺が堂塔を連ねていた。当時、蓮如上人もこれらの寺を訪ねていたと言われ、その足跡を示す証として今に伝えられている。これらについては後で記すことにする。

寺院跡は河北潟に近く敷地の周辺には、土壕が巡らされ、潟の水を取り入れていく筋もの堀が造られていたとの話がある。木越町の古い地図に、その水路を記した図面が残っている。今はその痕跡はないが、灌漑用とは異なり寺院を守るために人為的に作られたことが窺える。古老からの話として、堀の内側に土塁を積んだ跡が発見されたことが伝えられており、一向宗の拠点を物語る証の一つとされている。

木越・三光寺院跡から見える風景
（今昭町）



光徳寺跡の説明

◆血の川＝千田町、木越町

もう一つ「一向一揆」滅亡の名残を止めるものとして、千田町から木越町を抜け河北潟に流れる「血の川」がある。用水のような小さな川に、凄まじい名前が付けられている。

先に述べている三光寺院が織田軍勢の攻撃を受け、寺を守っていた一向宗の僧侶や信徒が、この血の川を渡って逃げのびる際、弓矢や刀傷を負った人達で、川全体が血で赤く染まったと言われている。

凄まじい光景を見た地元の人達が、伝説として後世に伝えているのではと推測していたが、
日本国土地理院の河川図に正式の名称として記されており、歴史の証ともなっている。

現在、川は改修され約２ｍの狭い川幅になっているが、７０年ほど前までは、倍以上の広さがあり、水量も豊かで、子どもたちは小船に乗り河北潟河口近くまで漕ぎ出し、舟遊びを楽しんだものだと、千田町に住むＡさんは懐かしんでいる。

昔から木越町一帯の人達は「水郷の民」とも言われ、河北潟との関わりが深く、三光寺院を追われた僧侶たちは、河北潟から船で宮腰（現在の金石）へ出て、海路、日本海を渡り奥能登へ落ちのびている。こうしたことから木越町は河北潟と日本海を結ぶ海路の拠点として、能登方面への玄関口であったと語られている。

◇門前町で寺を再興

織田軍勢に追われた光琳寺は信徒や農民を従え、鳳至郡門前町剣地を中心に同町の道下、深見、本内、内保、富来町赤崎へ移り、その後、剣地で寺が再興され、昔のままの木越光琳寺の名称で法灯を受け継いでいる。木越町を中心に、この地域には今も同寺をお手次とする門徒が多数いて、４００年余の信仰を繋いでいる。

光徳寺も門前町黒島へ逃れたが、後に加賀藩祖となる前田利家が七尾に入国した際、七尾に寺領と敷地を与えられて移ったとされている。同寺には、一向宗が加賀守護職・富樫政親を攻略したことや一向一揆をリードしたことに対し、蓮如上人が「僧職にあるものが無茶なことをするな」と軽挙をたしなめて送った「おしかりの御文」があることでも有名である。

また、光専寺は高松町流川に現存するが詳らかではない。一方、金沢の光専寺と所縁があるのではとの話もある

◇血の川余談

中日新聞北陸本社報道部の記者が石川県地図の中に、「血の川」という凄まじい名前の川に興味を抱き、インターネットでの検索により、千坂公民館が平成１２年５月に発刊した「千坂の歴史あれこれ談義」の項目に「血の川」が記述されているのをみつけた。

「一揆の滅亡を刻む血の川」と記されていることで、木越・三光寺院が関わる一向一揆について、専門の歴史書にはどのように書かれているのかと、金沢市立図書館で調査したところ、「千坂の歴史あれこれ談義」で語り合われていることと符合、語り継がれた歴史の重みに関心を深くした。

同紙が連載している企画記事の「ほんとかいね・そうなんや」にぴったりの題材であると、千坂公民館に取材の目が注がれた。記者と館長が血の川の現場へ同行、座談での話の内容を語り合った。この時のことを含め記者は「館長と血の川へ行った。広大な田んぼのど真ん中、小さな川を見下ろしていると「『ワー』と突撃する織田軍、一向宗双方の声、鎧や刀がぶつかる音が、聞こえてくるような気がした」と書いている。そして「合戦語り継ぐ血の川」との大きな見出しで、平成１８年３月１１日の新聞に掲載されていることを、歴史の余談として紹介することにした。

◇戦いの後の鎧、兜を発掘

もう一つ一向宗滅亡を示す事柄がある。今から約６０年前、木越町と境を接する今昭町で、土地区画整理のため光徳寺の跡地付近にあった「深堀」と呼ばれる堀を掘ったところ、底から鎧や兜など多数の武具が見つかった。村人たちの間で、木越の合戦を示すものだと話題になったが、だれかれとなく「これは不吉だ」「縁起でもない品物だ」と、口々に言い出し、いつしか散逸したという。

「今思うと、貴重な文化財であり、歴史の証にもなったのに、惜しいことをしたものだ」と幻の武具は地元の古老たちの語り草になっている。このように千坂地区に戦国時代の特異な歴史が刻まれていることを特筆しておきたい。

◆蓮如上人の足跡

蓮如上人は４３歳で真宗本願寺第８代を継ぎ、北陸、東海、近畿の各地域で、親鸞聖人の念仏の教えを基に、教化活動を広げた。１４７１（文明３）年、越前吉崎に坊舎を建て、念仏の教えを手紙の形式で分かり易く綴った「御文」で大衆の心を捉えた。今で言う情報活動の魁とも言える。

こうした活発な教化活動の足跡が、各地に伝えられているが、千坂地域でも次のことが伝えられている。

◇蓮如が渡った「うるし橋」

木越町の南側を流れる金腐川の千田町地内に、漆橋というコンクリートづくりの橋が架かっている。橋の名は漢字で「漆橋」と表示されているが、地域の古老たちは「うるし」ではなく、「うれしい」の言葉が訛ったものだと伝えている。

蓮如上人が金沢御坊（尾山御坊）へ立ち寄った際、本願寺派に属する木越・三光寺院をしばしば訪ねている。御坊を出てこの橋に掛かると、寺院の堂塔が目前に見えてきて「木越の寺に着いた。やれ、嬉や」と喜ばれたことから、「うれし橋」と呼ばれていたのが漢字の「漆」に変わったものだと、土地の人達は主張している。

◇今に残る「尾山道」

更に田中町から木越町に通ずる道は東山・内灘線となっているが、古くからこの地に住む人達は、今でも「尾山道」と呼んで馴染んでいる。尾山御坊と三光寺院を結ぶ幹線道路だったのではと言われ、この地域が河北潟を港湾とした能登方面の玄関口で、人、物の流通に大事な役割を果していたルートではと推測されている。

◇蓮如上人、手植えの八重梅

蓮如上人の足跡についてもう一つ書き加えることにする。千坂校下に隣接する木越町に福千寺という真宗寺院がある。

織田軍勢に追われ能登へ逃れた光徳寺の跡を継いで再興され、２２代に亘って法灯が守られている。

この寺に蓮如の法力を顕わす八重梅の木が本堂裏の庭に枝を広げている。木の根元に由来が記されている。それによると「蓮如上人が木越の浦のこの寺を訪ね、近郷近在から集まった人達に説教した後、記念にと自分が使っている杖を庭に押し植えされた。歳月が経ち杖が

根付いて枝葉が茂り、４月の下旬になると八重で五色の花が咲く不思議な梅の木」と書かれ、さらに「加賀藩主綱紀公が、この奇跡を耳にされ、城内の庭に移植されたが、育ちが悪く福千寺へ返した。途端に樹勢がつき、前にも増して美しい花を咲かせるようになった」と書き加えられている。

現在、枝を伸ばしているのは何代目に当たるのか詳らかではないが、元木と同様、白、黄、紫、ピンク、クリームの五色の花が、下に向けて咲く特質をそのまま受け継いでいる。

梅

変わった咲き方から「逆さ梅」とも呼ばれている。　開花も普通の梅より遅く４月中旬以降で、花と同時に実をつける特性もある。

際立った違いから蓮如上人のお力を目の当たりにするようだ。ただ残念なことに「近年は樹勢の衰えからか三色しか花を咲かせなくなっているのが寂しい」と住職の母親が語っている。これも生者必滅の世の習いを表しているようだとも言う。

また「昭和３０年頃まで、梅の満開時に合わせ、梅見を兼ねて近郷近在の信徒が集まり、住職の説教を聴きながら法悦の座を広げていたのだが、今は消滅しているのが寂しい。時代の流れとは言え、自然と和み教えを聞く心の世界を取り戻したいものだ」と、語っていた姿が印象に残る。

◆鷹匠橋＝福久町

福久町に「牛殺川」という恐ろしい名前の川が流れ河北潟に入っている。この川の下流に鷹匠橋が架かっている。金沢市の小立野台に鷹匠が住んでいた町として鷹匠町があるが、ここでは前田の殿様が鷹狩りをした場所としての名前が残っている。

それを立証する品物が同町の旧家である荒木さんの家に家宝として保存されている。殿様が鷹狩りをされた後、同家に宿泊され、その時に使用された草履である。白木の桐箱に収められ「前田利嗣公ご使用」と記されている。利嗣公は加賀藩主最後の１４代・前田慶寧公の長男で、廃藩置県後の明治７年７月、第１５代を継いでいる。同３３年に死去されているが、この間の明治１０年から約１０年間、この地で鷹狩りを楽しまれたとの記録がある。

荒木家は当時の福久村で肝煎りを務めていた太朗兵衛の補佐役として組合頭であったことから、殿様の鷹狩りの際には、宿泊場所として使われていた。殿様専用の風呂場、便所があった。今は改築で無くなっているが、その場所は残されている。殿様が宿泊中、家族は家を空けて移り住んでいたと言われている。

こうしたことから荒木家は利嗣公だけではなく以前の殿様も、鷹狩りの宿泊場所として使用されていたのではと荒木さんは語っている。

鷹匠橋は河北潟に近く水鳥が数多く飛来し、格好の狩場の拠点だったのではなかろうか。

以前は丸太を組み合わせた小さな橋だったが、平成５年の河川改修の際、鉄筋コンクリート

に架け替えられているが、橋桁には昔の名前のままに「鷹匠橋」と刻まれ歴史の名残を止めている。

鷹匠橋

◆牛殺川＝福久町

因みに牛殺川について付け加えることにする。この川は柳橋川の支流で、福久町を通り河北潟に流れ込んでいる。下流の福久町地内の両岸には、今も潟まで続く水田が広がっている。ひと昔前まではこの地域での農耕には牛が耕運機の役割を果していた。牛を対岸の水田に移すとき、川底の泥が深くぬかるみになっており、足を取られ、川を渡るのに難儀をしたことからこの名が付けられている。牛殺川は厳しい水田での農作業光景を一言で物語っている。

前田の殿様が鷹狩りした時の宿泊場所
（福久町の荒木家）

《神社》

千坂地域の１２の旧村落には古くから一村落ごとに神社が祀られている。「鎮守の森のお宮さん」と呼ばれ、樹木に囲まれる神社は、その地域の中心的な存在として親しまれてきた。

語る会での話と石川県神社誌、金沢市神社大観の資料に基づき記録する。

◆天（てん）の宮（八坂（やさか）神社・木船（きふね）神社）＝千田町、今昭町

二つの神社はいつ頃、鎮座されたか、詳らかではないが、いずれも式内社という格式から平安時代初期に遡るのではないかと言われている。

普通、神社は部落の守り神として、その地域での方角とか、あらたかな場所に建てられているのだが、この神社は千田町と今昭町の境界線上にまたがり、しかも田の真ん中にある。

これと言うのも、昔、この場所で田植えをしていた人が、強い雨が降ってきたため、仕事を翌日に持ち越そうと、田の隅に苗を纏めて置いていた。翌朝、作業に掛かろうとしたとこ

ろ、苗を置いた場所にお宮と森が忽然と現れていたというのである。

一晩のうちに降って湧いたような事件で、驚いた村人たちは「天からお宮さんが降ってきた」と大騒ぎとなり、それからは「天の宮」と呼ばれて崇敬され、神社起源としては珍しい伝説が今も昔のままに伝えられている。

そして、境内は千田町側と今昭町側に分かれて二つの参道があり、千田町側に八坂神社、今昭町側に木船神社と記した鳥居があり、二つの社があるように思えるのだが、森の奥のあたりで参道は一つに交わり、その先に一つの社殿が建っている。八坂と木船が一つの社に収まっているのである。

普通なら拝殿の前に掲額があって神社名が記されているのだが、何の表示もなく、ご神体を祀る本殿の前に「天王社」と金文字で書いた額が掛けられている。「天の宮」と言われるのもこの名と関わりがあるのではと語られている。

また神社の祭礼は千田町と今昭町の氏神様として、別々の日に行われていることも付け加えておきたい。

いずれにしても不思議な「天の宮」で、境内は鬱蒼と生い茂った樹木に包まれ「入らずの森」とも言われている。

昔から斧や鎌を入れることが禁じられ自然の姿のままで残っている。森の中は昼でも薄暗く「あそこには天狗が住んでいる」と言われ、今でも近隣の人達は「天狗の森」と呼んでいる。

これには天から降ってきたお宮だからと、恐れて天狗の名が付けられたのか、お宮や森を大事に守るため、一般の人を近づけないようにと、その名があるのではとも言われている。

また本殿の北側に小さな池があり、これにも天狗のまつわる話がある。池は天狗が地上に降り立った時の足跡だと言うのである。夏でも水は枯れない状態が続いている。このほか森の中に白狐がいて、千田町のＡさん（８３）は子どもの頃、何回も森の中を走る姿を目撃したと力説している。今でも色々と推測される話題の森である。

近年になって田の中に広がる森のたたずまいから昭和５６年３月、自然樹林として金沢市の保存指定を受けている。それによると「樹冠面接２，１００㎡、緑被率７７％の鎮守の森。２０ｍを超える高木３９本のうちケヤキの巨木２９本を数える。このほかタブノキ、クヌギ、エノキの高木やユズリハ、サカキなどの低木２７０本で構成され、遠く医王山を望み、四季折々に風情豊かな表情を表す樹林」と記されている。

千坂校下にとっては極めて貴重な森である。自然の姿のままに長く後世に伝えていきたい

ものである。

木船神社鳥居

◆少彦名神社（すくなひこな）＝横枕町

祭神は大己貴命、少彦名命の兄弟神が祀られ医薬の神様とされている。創建年代は不詳だが、医薬にまつわる話が先祖代々から言い伝えられ、今も町内の古老が語り部として引き継いでいる。

その話とは、「現在の本殿付近から温泉が湧き、冬でも雪の積もらぬ場所があった。よく鷺がきて湯浴みする光景が見られたのだが、ある時、いたずらで石を投げたところ、逃げ出した鷺は二度と姿を見せぬようになった。と同時にこれまで湧き出ていた湯が止まってしまった」と言うのである。

加賀にある温泉の起源にも似た話があって、もし鷺をいたぶることがなかったなら横枕町は、今と違った姿になっていたのではと、古老のＹさんは伝説を楽しみながら語っている。

また「今の鳥居付近に小さな池があった。ガッパと言い、子どもの頭にできるかさぶたにその水を付けると奇妙に癒えると言われ、近郊の子どもたちが訪れているのをよく見た」とも言い、この二つの話は、いずれも医薬に関することで、神社縁起にもつながる少彦名神社物語でもある。

伝説とは別にＹさんが祖父（安政４年生まれ）から聞いた次の話が語られている。

明治の初め頃までは、社殿のあったあたりは草の生い茂る竹薮だったと言う。明治４年の廃藩置県の折に、役所から「金沢城内に横枕町のご神体を預かっているから取りに来るように」との通知があった。村人達はどうしてお城の中にあるのか分からぬままに、恐る恐る受け取って今の本殿付近に仮安置していた。

少彦名神社・金沢城内にあったご神体を遷座（横枕町）

にあっ
町）

このことを聞いた神主が、「二俣町に使われていない古い社がある。その神殿を移して収めればよい」との指示があり、村人達が総出で二俣へ出かけ、解体もせず孟宗竹で作った台に乗せ、そのまま担いで運んできた。驚いた二俣の村人達は、何を無茶なことをするのかと、通行を妨害するトラブルがあったが、「神様のお通りだ」と突っぱねて捧持したのが、今の本殿であり、少彦名神社であると言うのである。ただどうしてご神体がお城の中にあったのか、あらたかな神様であるとの言い伝えのみで、それは謎のままである

◇横枕町余談

横枕の地名はふだん馴染んでいるので、変わった地名とは思えないのだが、特異な名称である。

しかも、この町会には横野、横川、横江、横井と横の名のついた家が多い。横枕との地名に関係があるのではなかろうかと、該当の人達に聞いてもルーツは分からないという。

また、この地域は以前から農村地帯で、現在も加賀野菜と言われる蓮根が栽培されている。普通、農家では「○○さー」とか苗字を付けずに呼ばれていたが、横枕町には今でも木越屋、神谷内屋、と言われる家がある。近隣の町の名前で、先に述べた温泉湧出で、この地で宿を開こうとしたのではと古老のＹさんは愉快な推測をしている。鷺伝説と合わせ興味深い横枕町である。

◆日吉（ひよし）神社＝千木町

資料によると大山咋命（山の神、農業の神）猿田彦命（教育の神、遊戯の神）が祭神。創立年代は不詳となっている。地元では、境内に樹齢８００年余の椎の木があった。その横に法光寺の名僧と言われた天光和尚が５５０年余前に手植された藤の木が、二本に分かれ椎の木に絡んで枝を伸ばしていた。この形から夫婦藤と呼ばれ夫婦和合のシンボルとされていたと言う。

椎の木は昭和６０年頃に枯れ、根元から切り倒されている。神木として巻かれていた注連縄が今も黒ずんだまま残っている。藤は全く消滅しているが、椎の木の根元からは新しい若木が数本、枝を伸ばしつつあり、何世代に亘って引き継いでいく生命力の強さを表しているようだ。

日吉神社境内に残る椎の木
（樹齢800年）の古株（千木町）

千木町のＨさん（９２歳）は、「若木は孫の孫として引き継がれていると聞いている。昔を語る証であり、８００年を超える古い神社に間違いはない」と語っている。

境内にはケヤキの高木１３本のほかモミジ、ハンノキの中高木５２本が茂り、平成１５年２月、金沢市保存樹林に指定されている。　一方、延喜７年４月の水害により社殿が流失し、その後、間もなくして再建されたとの記録がある

◆瓊瓊杵（ににぎ）神社＝福久町

福久町のほぼ中心地に鎮座されている。祭神は神代の天孫降臨で知られる天照大神の皇孫・
天津彦彦火瓊瓊杵尊ほか神代の四柱の神様が祀られ、創建は不詳だが、地元の話によると天正１４年５月、加賀藩主・前田利家の命により、河北郡内灘町にある小浜神社の末社数１０社が再興修理された際、同境内にあった末社が移転されて合祀されている

さらに大正５年になって、この神社の近くにあった加寿神社のかすがご神体が合祀され五柱が祭神となっている。

昭和５６年に地元有志で拝殿の改築が行われたのをはじめ、平成２年８月、同町出身者で西南の役、日支事変、太平洋戦争で戦没した人達の慰霊碑が建てられ、同６年９月に町内有志で境内をめぐらす玉垣が奉納され、神域の風格を高めている。

◆菅原（すがわら）神社＝百坂町

旧北国街道筋で金沢の北部玄関口に位置して建てられている。戦前までは神社前の道の両側は松並木になっていて、枝が茂り藩政時代の面影を止めていたと言う。

祭神は前田家の系譜につながる菅原道真公が祀られ、江戸への参勤交代の際、ここで襟を正し、気持ちを引き締めて参拝したと伝えられている。

本題からはずれることだが、２０数年前、社殿が荒らされ、ご神体を収めた扉の前にあった鏡が盗まれた。幸い盗まれた鏡が返ってきて、その時、立ち会ったＹさんの話では、鏡は裏に相対する龍と虎が彫り込まれた古い物で、その際、ご神体を拝ませて頂いた。梅の木で刻んだ道真公と共に、もう一つある物があったと言い、このある物を聞きたいところだが、Ｙさんは「これだけは勘弁してほしい」と堅く口を閉ざしている。

菅原神社の全景と参道
（百坂町）

もう一つ菅原神社には「老松」と呼ばれ、古くから親しまれてきた老木があった。幹は６人が手を繋いで囲む大きなもので、金石、大野辺りからも眺められ、漁から帰る船の目印になっていた。

惜しいことに昭和３４年４月の強風で倒れてしまった。このことが新聞で報道されると、全国から４０を越える銘木店が買い求めにきたほどの有名な樹木である。大勢の買い手の中から金沢市のある銘木店が、神木であるからと、値段を構わずに高額で落札して神社へ寄付している。現在の拝殿は、この老松で建て替えられたものである。根元は今も神木として残されている。

また境内には古くから「弘法の池」と呼ばれ、夏でも枯れることのない池があった。昭和２４、５年頃、このあたりでは地下から湧き出す「もっこり水」が出なくなると同時に干上がって、今はその窪みを残すのみとなっている。この名称については、弘法大師はこの地への足跡はないのだが、大師を崇める人達が、あらたかな池として呼んでいたのではと言われている。

◆八幡（はちまん）神社＝疋田町

主祭神は応神天皇、神功皇后ほか三神。創立年代は不詳。延長７年の大水害で社殿流失、その後、間もなく再建。明治４１年３月１９日、疋田神明神社を合併して一社となる。平成５年１１月、皇太子殿下雅子様のご成婚記念と伊勢神宮式年遷宮に合わせ拝殿の改築、社務所の新築、周囲の土留め改修を図っている

◆八幡（はちまん）神社＝荒屋町

譽田別皇命ほか三柱が祭神。慶長２年に勧請されたと伝えられている。平成８年１０月、住民の寄進により社殿が改築され、その際、境内に隣接して荒屋八幡児童公園が新設される。

◆日吉（ひえ）神社＝宮保町

祭神は大山咋命ほか三柱。天正５年に再建さると記録されているが、創建年代は明らかではない。江戸時代に同社のほかに市姫大明神社、多田之社があったが、江戸時代になって日吉神社の一社に合祀される。

◆諏訪（すわ）神社＝金市町

祭神は伊邪奈美命ほか二柱。
創立年代は不詳。明治５年に
村社に指定される。

代は不詳
より焼失。
。

◆熊野（くまの）神社＝法光寺町

◆市杵嶋（いちきしま）神社＝柳橋町

市杵嶋姫命ほか三柱。創立年代不詳。

《川祭り》

森下川以南から柳橋川の間にある神社では、４月８日を一日祭りとして、その村落の人達は祭礼を行い、今もその伝統を引き継いでいる。

これというのは藩政時代以前、今の北陵高校奥の塚崎町地内の山中に、豪族が砦を構え権勢を誇っていた。収穫物や税の取立てが厳しいことから、村人たちが一揆を起こして、その豪族を殺害、妻も近くの池で入水自殺を図り、一族も逃げ失せ一日にして勢力は壊滅した。村人たちが一揆成功の喜びを分かち合ったのが、祭りの始まりだと言われている。

喜びの祭りとは言え、派手なことができなかった事情から一日だけに抑えての祭りになっており、二つの川に挟まれた地域で行われていることから「川祭り」と呼ばれている。

ただ地域内にありながら祭礼は行われていないところもある。これは滅ぼされた一族をかくまったからだと言い伝えられている。

《獅子舞》

各神社には獅子頭を保存しており、祭礼の際は若者が獅子舞を演じていたが、戦後を境に廃れていき、現在は千木町と福久町が伝統を引き継ぐだけとなっている。

◆千木町獅子舞

金沢市の獅子舞は藩政時代に武術練磨のために行われたものが多いのだが、千木町の獅子舞は明治３３年頃から稲作の豊作に感謝して行われたのが始まりと言われている。

氏神様の日吉神社の秋祭りに青年団が中心になって、境内で奉納の獅子舞をした後、家々を回り町内を練り歩いている。

獅子頭は桐の木で作られ、牡丹の模様が入った蚊帳（かや）で構成され、長剣、短剣、木刀、棒などを使い、獅子を退治するまでの演技が行われる。

演技は獅子頭の部、棒ふりの部、蚊帳を支える胴竹の部、尺八の部の四部が一体となって行い、蚊帳の中には太鼓、尺八のほか三味線が加わる賑やかさで、他では見られない特徴を持っている。

青年団員が少なくなり、一時期、中断したこともあったが、町内有志の熱意で昭和５９年に千木町獅子舞保存会が設立され、小学校３年生以上の男子が、各部の役割を担って稽古を続け

伝統を繋いでいる。

獅子舞の用具や着衣は千木町会館に収容し、毎年、秋祭り前の８月に虫干しをして大切に保管している。

秋祭りの奉納のほか昭和６１年、長野県諏訪大社での奉納を初め、同６３年に加賀百万石祭り、平成３年１０月の千坂校下文化祭、同４年に再び百万石祭りに出演、伝統の技を披露している。

◇「加賀獅子」の復活を果した千木獅子舞保存会の活躍

１８８０（明治１３）年頃、神社で棒振りのみの祭りが行われていた。１９００（明治３３）年に現在の日吉神社の新築落慶を祝い、近村の有志による奉納として獅子舞が行われ、その後、１９５０（昭和２５）年より、町内に青年団組織が結成され、より一層の結束を図るため青年団活動の一環として田の豊年万作を祈願、祭りとして町内を練り歩いて演技していた。

千木町青年団は１９８４（昭和５９）年に、伝統のある獅子舞文化を後世にしっかり受け継がれることの願いを込め、現在に至っている千木獅子舞保存会が結成された。

それ以降、毎年、秋分の日に秋祭りの獅子舞が行われている。

獅子舞の棒振りの型は、真蔭流の流れに組みし、囃しには加賀獅子でもめずらしい太鼓、尺八、三味線を使用している。

今まで金沢市の百万石行列、長野県の諏訪大社への奉納獅子舞に参加している他、２００２（平成１４）年、前田家ゆかりの小矢部と獅子舞交流が始まっている。

26日、小矢部の祭りに〝金沢〟

県境超え獅子舞乱舞

来月9日、百万石博に〝石動〟

前田家ゆかりの地〝競演〟

共有の文化で交流スタート

◆福久町獅子舞

福久町には二つの獅子頭が保存されている。一つの町会で二つの獅子があるのは珍しいこととされている。いずれも明治の初期、有２００２（平成１４）年５月２６日　地元新聞　年余を経ている。

当時、福久町には二つの神社があり、今の県道を境に、瓊瓊杵神社側を「かみで」、加寿神社側を「しもで」と呼び、それぞれの神社で獅子を持っていたことによる。

大正５年、加寿神社が瓊瓊杵神社に合併した際、獅子頭も一緒に保存され、引き継いでいる。町民の獅子に寄せる思いが伝わってくる。

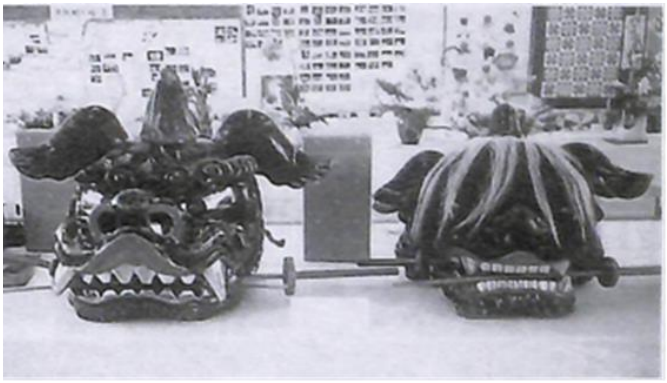
二つの獅子は大小の対で、形を見ただけではっきりと雌雄が分かり、大きな獅子には角があって、小獅子に比べ一回り大きく作られている。大きな獅子が加寿神社にあったと言われている。大小の区別について、何故、そうなのか、地元でもルーツは分からないと言う。

また対の獅子では神谷内町や春日町にもあり、獅子頭は同じ作者によるもので、兄弟獅子とか夫婦獅子と呼ばれている。

獅子頭は黒の漆塗りで渋い光沢を放ち、重々しい雰囲気の表情を表している。材料は桐の木が使われ、神社での奉納や町内を練るときに、軽くて使いやすいようにと製作され、材料の桐の木を探すのに苦労したとの話が伝わってはいるが、その木をどこから求めたかは知る人はいないと言う。

見ただけで荘厳な感じが伝わってくる獅子で、福久町の貴重な文化財として大事に扱われ、毎年の秋祭りに披露されている。

秋祭りは９月１５日に行われ、青年団、壮年会有志が瓊瓊杵神社境内で獅子舞演舞を奉納した後、大祓いの心を込めて町内を練っている。以前は要所、要所で太刀、棒の演技を披露、町内は盛り上がったが、今では昔の技を教える人が少なくなり、熱気と気迫も薄らいでいる。ひと昔前のことを知る人の間で、獅子舞保存会を設立してふるさとの文化を伝えていきたいとしているが、時代の流れというか、若者の関心が今ひとつなのが寂しいとの声が聞かれる福久町でもある。



瓊瓊杵神社の夫婦獅子

《神社境内に盤持ち石》

各神社の境内には、今でも「盤持ち石」という楕円形か丸い形の石が残っている。中には土に埋もれたり、僅かに顔を出したりしているのがあって、忘れ去られようとしている。

金市町に古くから住むＯさんは、そう言えば諏訪神社の拝殿横にちょこっと顔を出しているのがそうかも……。また法光寺町の熊野神社にも丸い石のあったことは聞いているが、今は何処にあるのか分からないと言う。

これらの石には一つ一つ名前が付けられ、戦時中の昭和１４、５年頃までは、神社の祭礼に欠くことのできないものだった。スポーツや娯楽のない時代で、この石を担いで行う「盤持ち石大会」が人気を集め、境内に集まった人達は熱狂。若者たちが力自慢を誇りあった。

石には最小２０貫から３０、４０、４５、５０貫と刻まれていて、何貫の石を担ぎ上げたかで順位が決まる方法。最も重い５０貫を長く担ぎ続けた者が横綱として力持ちの栄誉が与えられた。

担ぎやすくするため、「かっこ」という縄を鉢巻のように石に回し、手をかけて持ち上げるのだが、石がこすれて腹から胸元まで血を流しながらの壮絶な競い合いだったと言う。

当時、相撲も盛んだったが、盤持ち石大会は場所を取らず、経費が掛からなかったことから相撲の人気を上回り、横綱になった人は、祝い酒を配るなどして大会の権威を示し、他の村の祭りや大会にも出かけ力を誇示していた。

経済事情が厳しかった時代の流れを反映する行事でもあり、健康的なスポーツだったと、今もお年寄りの中には、当時を回顧し懐かしむ声が聞かれる。

現在、「盤持ち石」がはっきり残っているのは、瓊瓊杵神社境内入り口の松の木の根元に、大小７つの石が整然と並べられ、記念として大事に保存されている。その中にはっきりと４５貫と刻まれたものが見られ貫目を表している。

このほか菅原神社には七個あったうち３個が残されている。また日吉神社（千木町）では、餅石という名が刻まれ存在感を示している。少彦名神社でも亀石・四十貫と彫られ、拝殿の前にひっそりと置かれている。

このほかの神社でも名もなき石として見逃されているものもあるのではなかろうか。この記念誌発刊を機に、これらの石の探索を行い「ふるさと再発見」の一つとして生かし、静かに眠る石に昔の光を与えていきたいものだとの思いに駆られる。

れている＝少彦名神社
杵神社
見える＝諏訪神社

《寺院跡》

◆法光寺は幻の寺か＝法光寺町

法光寺は実在したのか。地名があることは、そこに寺院があったからであると言う説と、もしそうだとすれば、何か手がかりとなる記録があるはずだとする両論が論議されている。

地元の人達や歴史を語る会では次のように実在説が語られている。

法光寺町の旧北国街道筋にある熊野神社横から山手へ向けて坂道が通っている。現在、両側に民家が建っているが、約１ｋｍ上がった辺りから細い道となり、その先は山の麓で行き止まりになっている。何故、道が切れているのか、山への道もなく不思議でならない。しかも突き当たりの場所に平坦な一角が広がっている。その付近からは寺院の証ともいえる五輪塔や卒塔婆が壊れた形で残っていて、湧き水の池が作られている。どう見ても普通の跡地とは思えぬ形と雰囲気に包まれていると言うのである。そして旧街道筋から分かれた道は寺への参道だったのではと推測する向きもある。

卒塔婆

同名の寺が金沢市寺町にあり、関わりがあるのではと調査したが、無縁であると言われ、また羽咋市の放光寺が繋がりあるのではとのことで、同寺の住職に尋ねたが、判然とした資料はないとの話がある。

◆変わった名前のフンデラ＝百坂町

法光寺町から約２ｋｍ離れた百坂町地内の山手に、通称フンデラと言うところがある。戦時中は食料増産で甘藷畑になっていた。畑仕事をしていた人が古い石を掘り起こしたところ、字が刻まれていて、梵字で記した卒塔婆と分かった。数個が発見され、いずれも戸室石で出来ている。山麓で発見されたことと、通称フンデラと呼ばれていることと考え合わせ、古くからここに寺院があったからではと推測されている。

場所は百坂町の国道３５９号線と旧北国街道が交わるあたりから、急な坂道を上がった山麓で、一部が平坦な高台になっている。ここからは北部地域の町並みが眼下に見渡せて、遠く河北潟が望まれ、寺院としてのふさわしい光景が広がっている。

高台の一角には大きな銀杏の木が枝を広げ、秋には落ちた実で、黄色の絨毯を敷きつめたように見えると言う。

げる大銀杏

銀杏の木は火に当たると水を噴き出す特性から、寺院や神社など大事な建物の付近に多く植えられている。この１本の銀杏の木を仰いでいると、ここに寺院があったのだとの声が聞こえてくるようだ。と近くの人は語る。銀杏の木に昔のことを聞いて見たくもなるフンデラの地である。

余談になるが、この近くに藩政時代、加賀藩の処刑場があり、亡くなった人達の霊を慰めた寺院だったのではとの話もあるが、正式の名称が伝わっておらず、これもまた幻の寺なのか、歴史探求への興味がつのる法光寺町、百坂町界隈でもある。

◆金市町に真宗道場＝金市町

金市町にも寺院の存在を示す話がある。同町に古くから住むＯさんが、檀家寺である金沢市東山町の即願寺を訪ねたとき、住職が「ここのご本尊・阿弥陀様は３００年前に金市町にあった寺から移されてきたものだ」と話された。子どもの頃、祖母から「この町には蓮如上

人ゆかりの寺の道場があった」という話を聞いていたことから、それが事実であることを認識した。なんでも村落の中心にあったとのことなのだが、今はどこに存在したのか跡形もない。

ただ近くにある諏訪神社前の道筋を寺の口、横枕町・下水処理中継ポンプ場あたりを堂の口と呼ぶ通称が残っている。寺の存在を示す呼び名でもあり、金市町に寺院道場があったことの証ではなかろうか。

町

地域・環境の変遷

◆千坂校下と新幹線工事

千坂校下では新幹線工事の着工で地域は大きく変貌を遂げつつある。

同工事は東海道新幹線に対する日本海側の大動脈として、かねてから実現が待たれていた。

長野駅での開業に続き、愈々、日本海側への工事が始まり、１９９４（平成６）年５月、金沢駅高架化工事が決定すると共に、ルートが明らかになる。

千坂地域は倶利伽羅トンネルを抜け、金沢駅に入る路線上にあり、百坂町、横枕町、法光寺町、柳橋町が通過地域となる。２０００（平成１２）年から同地域での工事が着工され、１４年には、高さ１８ｍの高架化の姿が見え、大きく変貌する地域の状況を実感として受け止める。（写真参照・平成１４年４月撮影）

同１４年１２月には通過による新幹線森本橋上駅が完成する。ここから千坂地域を緩やかに走り金沢駅に入る新幹線である。

この工事に伴い先に述べた４町会のうち、高架の下になる住宅、事業所は立ち退きを余儀なくされる。

対象は百坂町で住宅、商店、金融機関、ガソリンスタンドなど１４カ所と、他の町会に比べ最も多く、中には築後１０年の住宅４軒が移住する。横枕町ではモモサカプラザ裏側で、運輸会社と住宅３軒が移る。法光寺町は横枕地下道から法光寺地下道間の蓮根田が殆どだが、平成６年に作られた児童公園がなくなり、因みに平成１５年３月３０日に、同地域内に「法光寺ふれあい公園」としてオープンしている。柳橋町では蓮根田を埋めて造成した住宅３軒と、その付近の蓮根田が対象となっている。

◆移転対象地域の在住者が座談会

新幹線工事の着工で、住み慣れた地域の姿が変貌するのを前に、公民館が主催して１９９９（平成１１）年３月、「地域を語る回顧座談会」を開いた。

移転対象地区の４町会長ほか長年、その地区に住む人達が集まり、土地環境にまつわる思い出を語り合った。

着々進む新幹線工事

◇消えゆく姿を映像に収録

４町の回顧座談会を受け、千坂公民館では消え行く姿を次の世代に残そうと、平成１１年３月２７日、視聴覚部員と歴史を語る会メンバーが合同で、「歴史を止（とど）める会」を実施した。

移転する住宅、事業所、埋没する蓮根田を回り、実際に見た感想を記録し、カメラ・ビデオに収録した。

中でも回顧座談会で話題になった「百坂の音楽堂」を目の当たりにして、現況のまま移転保存できないものかとの声が上がった。

この後、１４年に入ると高架工事が進捗、新幹線の高さから地域を見つめて貰おうと、日本鉄道建設公団の主催で、６月２日「ようこそ新幹線ウォーク」が行われた。

通過地域の百坂、横枕、法光寺、柳橋４町会から１５０名が参加。この日、山出金沢市長が出席。「新幹線に乗ったつもりで、古里を見つめて欲しい」との挨拶がある。まだレールが敷かれていない高架の上を歩く。防音壁があるため、架設の高台に上がり、千坂校下を眼下に一望すると共に、古くから馴染んできた地域の姿に思いを馳せた。

百　坂　町

旧北国街道筋に位置していることから、古くからの家が並ぶ一角がある。道路より低い家屋が残っていて、あれっと思われるたたずまいである。これは旧国道８号線が藩政時代の曲

がりくねった状態のままになっていて、交通の不便を解消するため、１９５０（昭和２５）年頃から、道路を拡幅直進する工事が行われた。その際、道路のかさ上げをしたことで、家屋がそのままの形で取り残されたものである。

◇道路工事でトロッコが走る

この工事の土盛りで百坂町の山手の崖を削ったり、法光寺町では熊野神社裏の山側の土を掘り出している。運搬には青年団の力を借りてモッコで運んだり、法光寺町ではトロッコの線路を敷いて運搬している。新設の道路用地は、当時、坪百円で買収されたものだと、Ｋさんは語っている。

土砂を掘り出した跡地は、いずれも宅地として利用され住宅が建ち並んでいる。

百坂町には切り立った崖の形で一部が残っており、土地の断層がはっきりと分かる。近年、森本断層が話題になっている折柄、地震の形態を止める貴重な地質資料になっている。

◇馴染まれた音楽堂が消える

移転する建物の中で、特に目を引くのは、「百坂の音楽堂」と呼ばれ、地域の人達に親しまれてきた音楽教室の建物がある。北陸自動車道の下付近にあり、６角の形をしたモダンな作りになっている。

１９４５（昭和２０）年の終戦の年まで、この町に住むＹさんがピアノの指導教室として使われてきたもの。同町に住むＹさんは、戦時中の激しい環境の中で、流れてくるピアノの旋律に耳を傾け、心が癒され安らぎを覚えたものだと懐古する。またお年寄りの間では、長年、馴染んできただけに、移転を惜しむ声が多く寄せられている。

六角形）が消える

◇生活に密着の用水

この付近ではもう一つの思い出が語られている。既に移転を終えている金沢信用金庫森本支店裏に四ケ用水を取り込んだため池があった。防火用となっていたほか、変わった使われ方があった。貴重な生活資料の一つとして記録することにする。

昔はわら縄が紐の主流で、色々な面で使われていた。この池では、縄の材料となる脱穀後の稲を、結束に強いものに仕上げるため、池の水に漬け「アクダシ」に使われていた。また、稲を乾燥する時に使うハサギ用の栗、楢の木を池水に浸していた。寒中に浸しておくと自然に木の皮が剥がれ、こうすることで藁にも木にも害虫がつかないためで、農作業を通じての知恵が生かされていたことを知ることができる。

また年に一度、池の掃除が行われ、その時には鮒、鯉、鯰が捕れて、成果を楽しんでいたと言う。今では到底、想像もできないことである。

四ケ用水は柳橋町から法光寺町、百坂町内を流れている。農業用水だけではなく、洗顔、

炊事の米・野菜のほか鍋、釜を洗ったり、洗濯にも使われ、生活に欠かせぬ役割りがあった。

そのことを示す形が今も一部で残っている。先に述べた音楽堂の前を流れる用水に、水をせき止めるため板をはめ込む溝が彫られていたり、用水に降りる石段が作られている。今も歴然とその形を見ることができるが「工事の進展でこの用水がどうなるのか、昔の生活の証として残してほしいものだ」との声が耳に強く残る。

このほか百坂町と法光寺町の国道山側にぶどう畑があったが、国道８号線（現在の３９５号線）の改修工事で切り取られ、今は住宅地に変わっている。

なお、百坂町ではＪＲ北陸線沿いで１３軒が移転する。

横　枕　町

◇西瓜畑に狐が出没

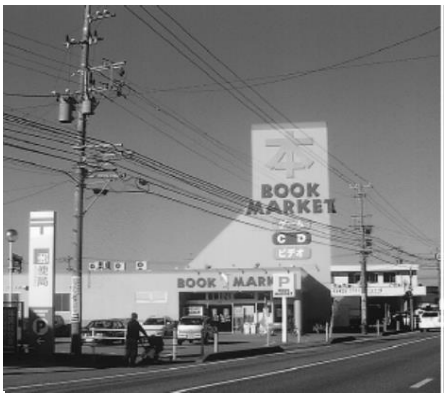
この辺りは昭和２５年頃までは畑が広がり一部稲田と蓮根田があった。畑では西瓜が作られ、初夏の季節になると近くの山から狐が降りてきて西瓜を食い荒らしていた。狐は利巧で熟した頃を見計らい、夜になると姿を現している。このため見張り番が出て、作物を守っていたのだが、今になると懐かしい狐撃退合戦でもあったと、夏の夜の一コマとして語られている。

法　光　寺　町

法光寺町での新幹線通過区域は北陸線沿い東側の蓮根田が対象。

平成６年、法光寺地下道の入り口付近に造成された児童公園が、設置５年余で移転を余儀なくされている。以前、公園が出来るまでは蓮根田が広がり、近くに建っている住宅も田を埋め立てて造成されている。

◇ぶどう畑が広がっていた



法光寺町）

この地域にもぶどう畑があった。現在の法光寺郵便局から山手の崖下にかけ広範囲で栽培されていた。昭和２５年頃、国道８号線の道路工事で畑が分断されたが、西側の国道沿いで一部の畑が残り、昭和４０年頃まではもぎたてのブドウが売られていた。

このぶどう畑に関連する話を伝えておきたい。１９５２（昭和２７）年７月、百坂小学校が豪雨による崖崩れで倒壊した。再建の話の中で、千木小学校との合併が持ち上がり、このぶどう畑が候補地に上がった。ところが`坂小学校に近いことから千木地区が反対。論議の結果、両地区の中間地点にとのことで折り合いがつき、現在の千木１丁目地内で新校舎が建設された経緯がある。

）

柳　橋　町

ここでは柳橋地下道入口付近の蓮根田と５軒の住宅が用地となっている。

この一帯も法光寺町同様、一部で蓮根作りの伝統を引き継いでいるが、地内を流れる柳橋川は昭和３０年代まで、集中的な雨が降ると、しばしば氾濫を繰り返していた。鉄道も水浸しとなり不通になることも多かった。こうした状況が積み重なり、普通の田に比べて底が深く、膝までつかりながらの作業が行われていたと言う。消えていく田の一つ一つに苦労の汗がにじんでいるのである。

屋

◆北部玄関口・交通網の整備

千坂校下は金沢市の北部玄関口に位置し、藩政時代から江戸に通ずる北国街道の面影を一部で残している。現在は国道８号線、同３５９号線が通り、北陸自動車道東インターが設置され、名実共に交通アクセスの拠点となっている。

こうした道路網の整備には地元民の協力によることは言うまでもなく、その一つ一つについて記録する。

◇国道８号線・３５９号線の整備

戦後の国道整備の中で、８号線は日本海側の動脈として、昭和２７年１２月、新潟市―京都市を結ぶ一級路線の指定がある。

それ以降、千坂地内では、鳴和―森本間の直線拡幅の工事が行われたが、自動車交通量の急激な増大で、金沢市内は勿論、その周辺部でも、いたるところで交通渋滞が発生する。

因みに片町では１９５８（昭和３３）年、８，８００台／日の通過台数が、１９７０（昭和４５）年には４４，０００台／日と５倍に達している。

こうした交通状況を打開し沿道地域の発展開発を目的に、金沢市今町から千坂地内を通り、
松任市（当時）福留間に至る２４．２３ｋｍの金沢バイパスが計画される。

昭和４２年に着工、１０年余の工期をかけ１９７８（昭和５３）年１２月に全線４車線が完成する。

金沢バイパスは北陸では初の大規模なもので、全線、低盛土方式が取られ、千木町―神野町間には全国でも珍しい高速自動車道併設区間となっている。

工事の完成に伴い、バイパスは国道８号線に変更、千坂地内の８号線は３５９号線とな

り、
千坂では２路線の国道が通る。
交通アクセスの充実で、急速に住宅地、商業地の造成が進められ、農業地域から一転して新しい町の姿に変貌を遂げた。平成６年には人口１万人を突破する大きな地域としての発展を見ている。

◇北陸自動車道東インター設置

北陸自動車道は１９６６（昭和４１）年７月から着工される。通過地域の千木地内で東インター設置の計画が示され、昭和４４年６月、設置場所に当る千木第二町会で、道路公団金沢工事事務所による路線説明会が開かれる。

工事に伴い通過地域で９世帯の移転立ち退きの計画が示され、数次の会合を重ね、移転補償はもとより環境、騒音対策を含め円満解決を図る。
現在、料金所付近に松の木があるのは、地元の要望により騒音解消のために植えられたものある。
インターは第１、第２の２コースが設置され昭和５３年１０月に完成している。この工事に伴い町会地域が分断され、２つの町会（千木親和、千木第二）が発足していることを付記する。

千木町）

◆柳橋川の改修

柳橋川は千坂校下の田畑を潤す重要な川である。源流は夕日寺町、御所町の山林を起点に神谷内町から柳橋町、疋田町、千木町を流れ河北潟に入っている。
国道３５９号線から河口までの４，４４２ｍが準用河川として指定され、それより上流は雨水河川となっている。
源流から河口まで距離の短い川であるため、北部地域に集中的な降雨があると氾濫を繰り返してきた。北陸線を挟んで一帯は水浸しとなり、柳橋川増水といえば列車不通が当たり前のようになっていた。
こうした状況を打開するため、昭和５０年から５９年にかけ河川拡幅と川底のコンクリート改修工事が行われ、地域の不安が解消されている。
因みに工事以前は両岸に低木の柳があり、川の名前にふさわしい光景が見られたが、今はその面影は消えている

◆その他

◇柳橋、法光寺、横枕、金市地域の蓮根田

加賀野菜の一つになっている蓮根が、小坂蓮根と呼ばれるのは、金沢市に合併する以前の小坂村地域内で生産されていたことによる。

その主流だった小坂町、御所町、三池町が近郊の都市化が進むと共に、この地域での生産は減少した。現在では千坂地区を中心に蓮根田が広がり、独特の田園風景を描いている。

良く整備された蓮根田や掘り上げ作業を見ていると、長年の伝統が引き継がれていると思われるのだが、この地域での蓮根栽培は法光寺町、柳橋町以外では昭和２５年頃に初めて導入されたもので歴史は比較的に浅い。それまでは米作中心だったが、土地が軟弱なことから蓮根に適しているのではと試し作りし、好結果を得たことで米から蓮根に転換している。

蓮根のさくさくとした味わいは格別なものだが、同じ地続きでありながら、横枕町と金市町で栽培されたものでは、味に微妙な違いがあると言われている。いずれにしても「こんもりと粘り」のあるのが小坂蓮根の特徴で、加賀野菜として全国に誇る持ち味を保っている。

◇柳橋川に「かわうそ」が棲息

柳橋川は昭和３０年頃まで、集中的な雨が降ると氾濫。北陸線を挟んで水浸しとなり、しばしば列車の不通があった。その後の護岸工事で川は整備されているが、当時は川の名の通り両岸に「川柳」「葦」が生い茂り、向こう側が見通せない情況だった。

棲息に快適な環境だったのか、今では幻と言われている「かわうそ」が水くぐりする様子が見られたとの話が伝わっている。

◇狐も出没

現在の千坂小学校が建てられた昭和２８年頃まで、一帯はススキが生い茂っていた。

ある日、Ｙさん（横枕町在住）が、今の松下クリニックのある場所で、稲を干すためハサカケをしていると、好天なのに川を挟んだ学校側に雨が降っている。僅か１００数十ｍしか離れていないのに、不思議なことがあるものだと見つめていると、そのススキの中に、若い女性が現れ傘を横にさしている。雨が降っているのにどうしたことかと、見ているうちに寒気がして薄気味悪くなると同時に、忽然と姿が消えてしまったと言う。

天気が良いのに雨が降ると「狐の嫁取り」と言われるように、全く狐に化かされたものだと、Ｙさんは当時の記憶を生々しく語っている。

なお千坂地区の東部は里山に接していて、百坂町の山手にある家で、今も夜になると狸が降りてくる。与えたパンの味が気に入ったのか、２、３匹連れで姿を現すこともあり、餌をやるのが日課になっていると言う。自然との共生が楽しめる千坂校下の一コマでもある。

◇モッコリ水が消える

柳橋町、法光寺町、百坂町の山手から横枕町、千木町一帯では地下から水が盛んに湧き出していた。モコモコと盛り上がるような状態から「モッコリ水」と言われ、飲料水や洗濯に使い生活の支えになっていた。

ところが近辺の道路工事や住宅造成が進むにつれ、家庭にあったモッコリ井戸の水の出が悪くなり、昭和２０年代後半になると上水道の普及もあって、モッコリ水が使われなくなり、井戸水を汲み上げる姿は失せている。

終戦前の昭和２０年頃までは、百坂町の菅原神社横で、ふんだんに湧くモッコリ水を利用して、ところ天や豆腐など冷たさを売り物に繁盛していた店があったが、水の出が悪くなりやむを得ず店を閉めている。

また近くの同神社境内の一角にある「弘法の池」も干上がり、今はくぼみの跡を残すのみとなっている。

ただ一つ、当時の形そのままのモッコリ井戸が、柳橋町・市杵嶋神社拝殿の上がり口に残されている。井戸の後ろに水の神様が祀られ、水は枯れてはいるが、水の恵みに感謝する心が印されている。当時を知る唯一の形であり、千坂校下の貴重な文化財の一つとして、大切に保存していきたいものである。

跡
前）

◇田んぼに愛称

千坂校下では、地域の開発が進み田畑が徐々に少なくなり、どこに田畑があったのか分からぬ日が近いのではと思われる。

そうした中で、先人たちが営々と耕してきた田には、人の名前のように愛称があって、今もその名が残っている。

北陸線を境にして山手の田をウチダ、海側をソデダと分けて呼んでいる。その中にはオオバヤ、ホンダ、ジョメサ、フカダなどと言い、今でもお年寄りの間では通用している。フカダと呼ばれた田は、呼び名の通り田が深く、当時、農耕の主役だった牛、馬さえ嫌って田へ足を踏み入れなかったと言う。

馬は利巧で、その田の前へ来ただけでクルリと向きを変えて逃げていった。田の深さが判断できる動物的本能で、長い足の骨折を恐れてのことだろう。これに対し牛は深い田も厭わず力を出してくれたと言う。

いずれにしても、今とは比較にもならない厳しい農作業の実態が語られている。

◇水に苦労の福久町

福久町は河北潟に近く、柳橋川の下流であるため井戸の水質が悪く、現在のような上水道がなかった昭和３１年頃までは、良い水を求めての努力が続けられている。「水が悪いから福久へは嫁にやるな」とか言われ、苦々しい思いにさせられたものだと語られている。事

実、
金気の強い水だったので、ご飯が黄色く炊き上がるなどの難儀が強いられている。
　このため、簡易水道設置の案が出された。当時、羽咋郡富永村で、池田寛一県議の援助で簡易水道ができ、水不足を解消しているとの話が伝えられ町会役員が施設を見学した。ところが建設資金が１，５００万円を要するとの話を聞き内容を聞くまでもなく、早々に引き上げてきたとのことが語り草になっている。
　この後、森本の月浦地内でため池を作り分水するとの話が寄せられた。区域外からの導入であることから、金沢市に相談したところ「もってのほか」としりぞけられた。しかしこれが契機で、市でも前向きに取り組むようになり、予算がないことから地元での一部負担の案が出された。
　当時、水道の本管は小坂町まで通じており、福久町までの工事では２，０００万円は掛かるとの試算だった。 到底、町独自では対応できる金額でないことから農協に相談したところ、快く引き受けて貰うことができた。 しかも、無利息という好条件で借り受けられ、昭和３１年、ようやく念願の水の恩恵に恵まれるようになっている。

用　水

　金沢には藩政時代に作られた用水が、市内の中心を流れ、近年、清いせせらぎを取り戻し、町の美化と同時に観光的にもクローズアップされてきている。
　千坂地域にも三つの用水が流れている。これらは生活に密着した水として、古くから大事な役割を果している。
　一見したところ何処にでもと思われる流れだが、水田、蓮根田を潤しつつ、ひっそりと流れている。

◆四ケ（しか）用水

　四ケ用水には神谷内地内で柳橋川からの流れを一部堰き止めて作られた取水口がある。そこが源流である。
　柳橋町、法光寺町、百坂町、荒屋町の四地域を流れていることから四ケの名が付けられている。

取水口付近は川底が深く水が多かったので、６０年頃までは子供たちの格好の泳ぎ場所になっていた。

百坂町でもその頃は水量が豊かで、綺麗な水が流れていた。川底にはシジミ貝がいたり、ウナギを捕まえることも出来、河北潟から上がってくる鮒や、悠々と泳ぐ鯉の姿を見ることができたという。

また、ご婦人達は、この用水で米をといだり、野菜を洗い、時間を決めて洗濯をするなど、生活に密着した流れとして活用されていた。今の人にこの話をしても理解できないだろうし、歳月の流れに隔世の感を深くする。農業の人以外は見向きもしない用水だが、生活の香り漂う清水であったのである。

現在は護岸工事が行われ、川底がコンクリートに変わり、川沿いには住宅が立ち並び用水の面影は薄れているが、時代の流れを刻みつつ、灌漑用の大事な使命は続いている。「千坂校下に用水は流れる」の一コマである。

◆五百石（ごひゃくこく）用水

もう一つ柳橋川から取水した用水に五百石用水がある。 柳橋地内の国道３５９号線から疋田町寄りに約２００ｍ入ったところに源流がある。

小さな取水口で見逃しそうな簡単な設備だが、空圧式で堰を作る仕掛けになっていて、しっかりと用水源流の機能を果している。

ここからは柳橋、法光寺、横枕、金市の４地域一帯の田に水を送っている。 この辺りの米五百石を収穫する命の水だという事で、この名があると言われている。

◆三ケ（さんか）用水

以上の二つが千坂校下を流れる用水の主流であるが、柳橋川の下流になる福久町では、どうしても水不足になりがちで、柳橋川とは別の水路から水を得ている。

二俣町の山間を流れる水で三ケ用水が作られ、月浦、吉原の森本地区から福久町に入っている。

三つの用水について記してきたが、その地域の人達には用水に関わる様々な事柄が綴られている。その一つに江田米（エダマイ）といい、下流で耕作している福久、荒屋、千木、横

枕町の人達は、上流に当たる柳橋、法光寺町の区長を訪ね米に酒、肴を添えて毎年の挨拶を欠かさなかったという。意地悪されて水の流れを変えられることがあれば、それこそ死活問題だったと当時を振り返る。この慣習は昭和４０年頃まで続いている。

また用水の流れを守るため、利用関係者が協力し、毎年、泥上げ作業を行い、水流の管理と環境の美化に務めていることを付記する。

町名の由来

◆柳橋町

柳橋町には親鸞聖人にまつわる伝説があって、鎌倉時代からの地名が引き継がれていると言う。

伝説は越後に流された親鸞聖人の夫人・玉日姫が、後を追って越後に向かう途中、この地の街道筋の茶屋で休まれた。たまたま大雨で近くを流れる川が氾濫、橋が流失して渡れなくなった。困った姫は川筋にそびえる柳の大樹を見て、「柳に霊があれば川を渡してたもれ」と祈念すると、柳が自然に倒れ橋になったと伝えられ、この奇跡が地名の起こりと言われている。

またこの時、親切にしてくれた茶屋の好意に報いるため京団子の秘法を授けられた。

この作り方を引き継いだという店があって、昭和１０年代の終わり頃まで「柳橋団子」の名称で販売され、東金沢駅の構内でも立ち売りをして人気があったと言う。

（柳橋町）

現在も同町にある菓子屋さんが、その団子の研究を重ね、資料を模索して、串に刺した昔ながらの団子を製造して販売、町会の夏祭りにも店を出している。砂糖などなかった時代のことであり、甘味を抑えた素朴さを売り物に、柳橋団子を次代に伝えて行きたいと意気込んでいる。

◆百坂町

百坂町には縄文遺跡があったと古文書に記されていることから古くからの名前であると言われている。

現在は百坂町となっているが、桃ケ坂から百々坂、百ケ坂とも書かれ、表示の変遷はあるが読み方は殆ど変わっていない。

百々坂と言われた藩政時代は金沢から富山県福光町へ通じる街道があった。現在のように吉原町から堅田町を通り福光町への道路はなかった。

これは平地を流れる森下川が氾濫を繰り返し、いつも川筋が変わったりしていたことから

山の尾根が街道となったもので、山道で坂が多い道筋なため百坂（モモサカ）という呼び名があつたのではと言われている。

この古い街道の基点は菅原神社の裏手から山の尾根を伝うようにして造られていた。荷車が一台、やっと通れる狭い道で、今も随所にその跡が残っている。

いずれにしても百坂町は金沢の北部玄関口であることは、今も昔も変わらない。街道筋の面影を残す町でもある。

◆法光寺町

法光寺町は寺院跡の項目で述べたように、寺が実在したとされ、寺院名がそのまま町名となったことが推察される。

◆その他

１９５３（昭和２８）年、千坂小学校の発足により、それまでは小坂地区の行政区域だった１２町（前記）が分離して千坂校下が誕生。現在は２３町会となっている。

河北郡時代からの村名が引き継がれている中で、新保荒屋が荒屋町、金市新保が金市町、今村が今昭町にと若干の変更はあるが、いずれにしても古くからの名前が残っている。その他それぞれの町名の由来については今後のテーマとしたい。

暮らし・生活

１９５５（昭和３０）年代から４０年代にかけ所得は戦前を上回る水準に達し、テレビ、洗濯機、冷蔵庫の家電製品は３種の神器と言われ、急速に家庭に普及していった。

一方、東京タワーの建設、新幹線開通、東京オリンピックの開催など国家的事業が相次いで推進され、敗戦による苦しい記憶は徐々に薄れていった。

時代の流れとは言え、物の豊かさを実感しつつも、心の充実感が失われている。

こうした社会環境の変化を見つめつつ、「千坂の歴史を語る会」で語られた体験を懐古談としてまとめ、次代への参考の一つとして記録することにした。

◆川や用水で洗濯

桃太郎のおとぎ話ではないが、昔は川で洗濯するのが当たり前だった。私たちのこの地域でも例外ではない。

疋田町のＫさんは、子どもの頃、近くを流れる金腐川で母が食器を洗い、洗濯したり顔まで洗っていたのを覚えている。今でもはっきりと目に浮かんでくると当時の生活を振り返る。

れた用水
）

今は護岸工事でコンクリートになった部分が多くなっているが、以前は堤防から川に降りる細い道をつけ、川岸で洗濯できる場所を作っていた。隣近所の人が集まって来て、そこがコミュニケーションの楽しい空間でもあった。

四ケ用水が流れる百坂町でも同様だったと、Ｙさんも共鳴して語っている。

◆川水を濾(こ)して利用

疋田町では井戸の湧き水が少なかったので川水を利用している。川ふちに一斗樽を置き、樽の底にシュロを敷き、その上に小石と砂をまぜて水を濾す装置を作り、濾した水を竹管に通し各家庭に送水していた。

一方、山手の法光寺町、柳橋町では山の水の利用に知恵を働かせていた。山からの水の流れに沿って竹を繋ぎ、山裾にタントと言う、桶を地中に埋めて水を溜めていた。

このほか地下から湧き出る水（モッコリ）の利用など、様々な水との関わりが生活の根底にあった。

今のように蛇口をひねれば、とめどなく水が出てくるのが当たり前だとする生活環境とは雲泥の差があり、今昔の感を深くする。４０年余の間で生活のあり方が極端に変わっている。

便利さに埋没し「ありがたい」「もったいない」の言葉が失われ、死語になっているだけではなく、その心がどういうことなのかも分からなくなっているのは嘆かわしい。

◆井戸水での生活

もう一つ井戸水のことについて記しておきたい。水道が普及されていなかった昭和３０年頃までは、各家庭に井戸があり地下水を利用して飲料から洗濯に使っていた。

水脈の関係で井戸水が出ない家では、桶やバケツに汲んで貰い水をしたり、竹の樋を繋いで数軒が共同で利用していた。

それだけにお互いの絆が強く、向こう三軒両隣りの助け合いの精神が、地域に生きる力ともなっていた。

これらの井戸についても苦労話がある。柳橋川、金腐川が氾濫すると、低地にある家では泥水が井戸に流れ込み、使えない日が幾日も続き、井戸水の汲み替えが終わるまで利用できなかった。

こういう時に井戸水を替える専門の職人がいて、素人では到底、処理できず大変な負担になったものだと言う。

◆火鉢が暖房の主役

房の主役

生活の全てが電化された現在では理解できない話である。５０年くらい前までは冬の暖房は火鉢が主役だった。

朝、起きると火鉢に火を入れるのが、一日の最初の仕事とされていた。炭を火鉢の灰の上に置き、燃えやすいものを火種にして火を起こすのである。置き火といい前夜の燃え残りの炭火を灰に埋めておいて使う方法もあった。

火鉢は暖房だけではなく、火鉢の灰の中に五徳と言い、三脚または四脚の輪形の器具（鉄か陶製）を据え、鉄瓶や鍋を乗せて湯を沸かしたり、煮物や焼き物に使われている。

火鉢の灰をならすためセンバという小物もあったのだが、今は殆どお目にかかることは出来ない。

寝るときにはコタツが使われた。今の電気コタツと形はほぼ同じものだが、電気の代わりに炭、タドン、練炭を入れたアンカを炬燵台の下に入れて暖をとっていた。足で蹴ってもくるくると回る工夫されたもの、足を下に降ろせる堀炬燵もあった。

◆蚊帳の中で寝る

夏になると寝床に蚊帳を吊って寝ている。下水や環境の整備が不備で、夏には蚊が発生、夜になると家の中を飛び回る。蚊に刺されるのを防ぐために使われた。緑色の麻地に赤色の縁取りをしたものが定番の品で、一家で何人もの家族が枕を並べて就寝している。親子で一緒に寝た夜の光景は忘れられない。家族の絆を結ぶ蚊帳だったと懐かしく語られている。

◆竈（かまど）でご飯を炊く

今はご飯を炊くのは電気、ガス炊飯器に決まっているが、電化されない頃は竈が使われていた。石か煉瓦で作られ、竈の上に鉄釜を乗せ、火入れ口に木屑や藁を燃やして炊いていた。そして燃え残った木を「けしこ」といい、火消し壷に入れ、炭火を起こす種火として再利用されていた。リサイクルはこの時代からも生活の知恵として生かされていたのである。

これまで述べてきた数々は、日常生活の必需品だったが、戦後を清算するかのように、電化の波に押されアッという間に姿を消していった。すでに歴史の一コマとなっている。

◆各町に防火貯水池や消防小屋

阪神・淡路島大震災を教訓に防災への意識が高まり、千坂校下でも自主防災会が組織されているが、防災に対しては以前から意識が強く、生活の安全を守ろうと対策を講じてきてい

る。

昭和３０年頃までは、校下の各町会に防火用の貯水池があった。百坂町では町を流れる四ケ用水を取り入れ、北陸自動車道の下に作られていた。水漏れを防ぐため池の周囲を荒縄で太く繋ぎ、脱穀した稲の茎を織り交ぜ土で固めていた。長方形や四角形で、こうした形の池は法光寺町、柳橋町にもあったが消火栓の敷設で消滅している。

貯水池のほか各町会には消防小屋があって、ガッタンと呼ばれた手押しで放水するポンプが置かれていた。この小屋も殆ど姿を消しているが、横枕町には昔のままの形で残され、ポンプも保存されている。また小屋の外に災害発生の際に打つ鐘が吊るされ、中には「横枕消防組」と記された纏や竹で防護された古いホースも残っている。平成１７年には外壁の修理が施され、町会の文化財としていこうとの声があり、町の自慢ともなっている。

もう一つ宮保町にも建物が残っている。日吉神社拝殿に隣接して設置され、戦時中まで使用されていた。現在は町会の物置になっているが、同町では以前から消防活動が活発であったことから、防火意識の高揚と町の歴史の一つに残しておきたいとの話がある。

横枕地内に現存する消防小屋

昔の消防小屋が残る（宮保町）

民俗伝承・昔の生活文化

新幹線工事で古くから馴染んできた地域の変貌を惜しむと同時に、自分たちの生活の中にも近代化の波に埋没、変化していくものを今に残しておきたいとの声が寄せられた。

「千坂の歴史を語る会」では、大事な事柄と受け止め、石川県文化財審議会委員・加能民俗会長の今村充夫氏を講師に招き「民俗伝承・昔の生活文化」をテーマに語り合った。

今村先生は冒頭に「昭和３０年頃から戦後の混乱を脱し高度経済成長に入った。物質的な豊かさに恵まれた反面、日本古来の精神的な文化が崩壊しつつある。果して日本はこれで良いのか」との問いが出された。

また、人の一生は節目、節目を大事にしながら伝統を引き継ぎ、生涯の道程を越えている。生誕に始まり成人、結婚、厄年、還暦、そして最終に葬式の順序で、その節目には通過儀礼としてのしきたりがある。それらの儀式が簡便化し、合理化の波に押し流されている現状でもあり、日本の良俗美風として記録することの大切さを強調された。その一つ一つを追

っていくことにする。

《誕生》

子どもの出産では「子宝に恵まれる」と言い、親は勿論、身内では大変な喜びようだった。それだけに安産を願う様々な思いや願いが込められている。

◆戌の日に合わせ腹帯を締める

妊娠が分かると一番先に氏神様に参り、安らかな出産を願い祈願をする。５カ月目に入ると戌（いぬ）の日に合わせ腹帯を締める。この日に拘るのは、犬は動物の中で多産のわりに、すんなりと出産していることにあやかろうとするものである。

実家の母か姑、産婆が手伝って腹全体に巻きつけるのだが、ぐるぐると巻くのと、折り曲げながらの二通りの方法がある。

腹帯は胎児の血が騒がないように押さえることと、仕事がしやすいようにと巻いたものである。現在は病院でも腹帯を使っているが、伸縮があって昔の腹帯とは使い方の意味が違ってきている。

胎児が男女であるかは関心のあるところで、今日では医学的に判断できるようになっているが、昔は腹に突出があれば男、平たい形は女として見分けていた。

また妊娠後の年賀に、訪れた人が男性であれば男の子が生まれるという占いみたいな話もあった。

◆妊婦は火事を見てはならない

妊婦には見てはならない、してはならない禁忌があった。一つには火事の際、火を見てはいけない。火を見ると赤あざのある子が生まれると言うことで、居室に閉じこもっていた。

葬式に出ることも禁じられている。黒いあざのある子が生まれると言われ、どうしても出席しなければならない場合は、鏡を懐に入れ、死んだ人の霊がお腹の子に移らぬよう、表を前にして反射させるようにしている。

また物をまたがないこと、高いところへ手を伸ばしてならないとか、妊婦への行動に注意を促している。あらゆる面で出産に心を配っている。

◆出産前に「ころころ団子」

９カ月になると実家へ帰りお産をすることになる。出産前に実母が「ころころ団子」を持参して婚家へ挨拶している。これも戌の日に合わせて行うしきたりとなっている。団子と言っているが、実際は餅で長方形か楕円形にして作られている。すべすべした肌をした健康で可愛らしい子どもが「ころころ」と授かりますようにとの願いを込めてのものである。

１０カ月になるといよいよお産である。今は全て西洋式にならった出産方法が取られているが、昭和の初め頃までは、座ったままでのお産が普通で、名実共に産みの苦しみを味わっている。

◆お産は親子を結ぶ絆

昭和２０年頃までは、今の伸産（寝産）とは異なり、殆どが家での座産である。天井から吊るした紐を握り、体を支えるため炬燵のやぐらか机など固定したものにつかまってのお産である。妊婦に負担が掛からないように、筵や腰巻を広げ、その上に灰を入れた袋、藁すべ、藁布団を乗せ、一番上に油紙を敷いている。大変な準備をしての出産である。初産は実家でするしきたりになっていた。

こうしたことを体験しているＯさんは、苦しみを越えて生まれてくるだけに、出産は親と子との深い愛情を結ぶ絆だと目を閉じつつ語っている。

また出産の際、父親は立ち会わないのがしきたりであるが、へその緒を切った後に残る胎盤の始末は、父親の役目で、これは誰にも分からないよう土の中に一人で埋めている。出産を終えると悪い血が騒がないようにと出産前と同様に腹帯を締めている。血が頭に上がるのを押さえることと、広がった腹を締めるためにとされている。

◆産後は食べ物に注意

産後、２１日間は謹慎の生活を心がけ、特に食べ物に気を使っている。蛸、いか、蟹など血の気のない魚を避け、果物は体が冷えるとして食べないようにした。反対に牛蒡や魚では鯉、鮒、鯛は血を増やすと言われ、蓮根は乳がでると言うことで、嫌いでも食べるようにしている。

《幼児の儀礼》

赤子から幼児時代のしきたりについて述べる。

◆産後、７日目に七夜祝い

赤子は出産後、７日目になると早くもしきたりがある。七夜と言い産着を着せる習わしである。しちや衣服をつける初めての行事で、真綿で作った２尺１寸の簡単なもので手玉と呼んでいる。男児は青色、女児は赤色、黄色は男女兼用の色分けになっている。オムツは浴衣を利用していた。

生まれて７日の間にかかった風邪はなかなか治らず、一生ついて回るとか、産屋（うぶや）の風邪は一生つくとか言われ、７日目を健康で迎えたことに感謝する習わしがある。

婚家の女性が祝餅を持って訪ねている。赤子はこの日に名前がつけられている。

名前には拘りがあって、例えば丑年(うしどし)に生まれた子が、ねまり牛にならぬようにとの願いから「外」の字をつけたりしている。特に次、三男の子に多かった。

今の少子化時代とは大違いで、昔は１０人も出産する人もあったが、そのうち３分の１くらいは幼児のうちに死亡するのが多かったという。

近年は医学の進歩で死亡率は低くなり、このため世界一の長寿国を誇るようになっていることは喜ばしいことである。ただ少子化の傾向にどうして歯止めをかけるか、家庭や社会の問題として捉えるべきだとの声が多く聞かれた。

◆赤子をおんぶして挨拶回り

産後２０日から４０日の間に、実家から初産戻りをする。この時、子供の箪笥、紋付の着物、洋服、寝間着、おしめ、乳母車を婚家に届け、また五色生菓子に鯛をつけて祝意を表した。さらに実家の母が赤子をおんぶして隣近所に紅白饅頭を配って挨拶をする。

次の祝いは「百日の食い初め」と続く。出産１００日目にミニチュアのお膳に赤飯と鯛を添え赤子に食べさせる真似をするのである。

「赤子の魂は百まで」と言われるように、こうした心づくしが、赤子の心に温かく、優しく伝わって行くのではなかろうか。

◆天神様を祀り学問の向上を願う

誕生から一年。男児が生まれた家では、勉強ができる子になるようにと、勉学の神様と崇められている菅原道真公を祀った天神堂（小さな社（やしろ））を床の間に置き、誕生後の１２月２５日から１月２５日までの１カ月間、礼拝して学問の向上を願っている。加賀前田藩が道真公の系譜に繋がることからだと言われている。

◆お尻に餅をつけて祝う

次に健康に関するしきたりである。１年目の誕生日に力餅といい小さな餅を作り、幼児の足の裏とお尻にたたき付けて祝っている。変わったやり方で、何でと思われるものだが、これは「足腰が強くなるように」とのおまじないである。

このほか健やかな成長を願う行事がある。女児が初節句を迎える上巳（じょうし）） （３月３日＝陰暦３月初の巳の日）と男児の端午（５月５日）の日に、息災であるようにと、「草餅」や「ちまき」を作って食べる風習は、少数派ながら今も伝えられている。

「草餅」はハハコグサ、ヨモギを入れてつき、「チマキ」は餅を長円錐形にして笹の葉で巻き、「いぐさ」で縛って作られている。

成長と共に男は三歳と五歳。女は三歳と七歳になると、晴れ着を着て氏神様へのお宮参りがある。「七五三」と言い今もこの風習は引き継がれている。

◆悪病を祓う川流し

一方、病弱の子には悪い神様がついているからだと言い、病魔を川に流そうと、いも（痘）流し、はしか（麻疹）流しなどが行われている。さんだわら（桟俵）＝米俵の両端に当てるため丸く藁で作った蓋＝に男女２組の人形を乗せ、赤飯のおにぎりを供え、２本の赤い旗を立てて流している。

疱瘡や麻疹は５、６歳までの子供に多く発生、感染力が強く恐れられていたからである。

医学の発達で今は全く見られなくなったが、昭和１０年代後半までは、近くの金腐川でもよく見られた光景だという。

この病い流しをした後には、振り向いてはならない、家へ着くまでは一言も喋っては駄目だとされ、実際に堅く守られていたと語られている。

◆病気の治療におまじない

病気に対しても変わったおまじないがあった。子供が百日咳にかかると、その子の手に墨をつけ、半紙に手形を取り、家の玄関など人目に付きやすい場所に張り出し、百人の人に見て貰うと咳が止まるとの言い伝えがあった。

１９４５（昭和２０）年の終戦頃まで、手形の紙を玄関先で見かけたものだと言う。これは病いを担いで貰うとの意味が込められている。誰でも医者に掛かることができず、自分の家で病気を治すのが一般的だったからである。

《成人式》

２０歳での成人式は全国的に定着。金沢市では各地区の公民館が主催し、式典や激励の集いを開いているが、終戦前までは特別の行事はなく、大人になったことを認めるあり方として、地域の青年団に入ることが成人であり一人前とされていた。

その頃は神社を中心とした活動が地域活動の支えになっていて、祭礼の際に町内に「注連縄」を巡らしたり、獅子舞に参加するなど地域に密着した奉仕活動が半ば義務づけられていた。それだけに地域は若者のパワーで活力に満ちていたものだと、当時を懐かしむ声が多く聞かれた。

近年、青年の地域離れが指摘されている。時の流れとはいえ少しでも昔の姿を取り戻したいものである。

《結婚》

男子が成人になると近親者の間で嫁取りの話が出てくる。とは言え現代とは違い封建的な社会環境の中にあって、男女の交際は自由ではなかった。

◆結婚までに長い道のり

盆踊り、報恩講踊りなど、年に１、２回の行事があって、男女が一緒に参加する交友の場となっていたが、結婚に結びつくまでに至らないのが普通だった。今のようにイベントも少なく、携帯電話やインターネットが発達していない時代でもあったから、思い募らせても通じ合えるチャンスがなく、結婚への道程は遠かった。

気に入った女性と結婚するには、まず男性側の親戚か親しい人に仲人になって貰い、相手側に申し入れするのが順序になっている。

しかしすぐ承知しましたという家は殆どなく、気に入ってもわざわざ断るのが建前になっていた。断る理由も娘はまだ若い、家格が違う、交際ができていないと言うもので、仲人の苦労は並々ならぬものがあった。「金のわらじを履かねば嫁はこない」と言われるように、何度も何度も訪ねての努力によって結婚が成立している。

今のように親も知らないうちに二人が結ばれることは殆どなかった。それだけに結婚には双方が重い責任を持っており、離婚とは思いもよらぬことだと言う。

◆縁結びに苦労の媒酌人

仲人は結婚が纏まりそうな感じを受けると、酒をかくして持参。「しめ酒」として親に届けている。

ここまでが正念場で、この後は祝いの本酒を贈る日を決めて「めでたし、めでたし」となるのである。

こうして初めて男性側が女性の家へ招かれ結納品を収める。

結納は帯代といい、結納金と帯、反物に、お土産として両親、兄弟姉妹に品物を贈る。この席で結婚式と同じようなご膳のご馳走がふるまわれる。

結婚式は大事な儀式であることは言うまでもないが、これに至るまでには細かい配慮が払われている。何事も段取り肝心と言われるが、人生への新しいスタートに、このことが生かされているのを見ることができる。こうした古くからの慣習は引き継がれてはいるが、今は簡略への傾向が強くなっている。

◆行列つくり嫁入り道具運び

今は全く見ることがなくなっているが、ひと昔前までは、結婚式の前に新婦の近親者が列を作って嫁入り道具を運んでいた。衣桁（いこう）と言い、鳥居を形どった着物掛けを先頭に行列ができる。「行こう」との心を込めていて縁起をかついでの表れである。

これに続き箪笥、長持ち、帯、のれん、鏡台、下駄箱、塗りの盥　（たらい）などの家具類。桐火鉢、炬燵（こたつ）の暖房具、箒（ほうき）・塵とり、はたきの掃除用具、塗りご膳、茶碗、小皿などの食器。上等の物では掛け軸、屏風なども持参。農家の場合は、菅笠（すげかさ）、手甲（てっこう）・脚半（きゃはん）までも用意している。このほかにも米俵

に藁細工の鶴亀を飾り、一斗の赤飯を添え両家の繁栄を願っている。
道具を運ぶ人達は背中に家紋をつけた法被（はっぴ）・股引き姿で、二人一組となり荷物に棒を通して担いでいる。そして青竹を杖にして祝い歌を歌いながら行く。出発の時、祝い酒を頂いているため、よろめきながらの行列を見かけたものだと言う。
今は嫁入り荷物は専用の大型車で収められているが、昭和１０年代頃までは、昔からの慣習が引き継がれていた。
荷物運びに労力を払っていることから、「遠いところから嫁さんを貰わなくても」とも言われたもので、また行列の長さが家格を評価する尺度にもなっていた。道具入り行列が１ｋｍに及ぶ豪勢なものがあったと語り草にもなっている。
花嫁が嫁ぐときは、花嫁行列と言われ、髪を島田に結い振袖姿で身を整え、両親、親族が付き添い、しずしずと婚家まで歩いていく。現在のように車を使うことは殆どなかった。新婦が婚家に着くと、その家の家族のうち女児二人が出迎え、手を取って家の中へ案内する。女児がいなかった場合は親族で代わりを立てる。

◆合わせ水で夫婦の誓い

その際、新婦は竹の筒に入れて持ってきた水と新郎は「かわらけ」に注いだ酒と合わせ、仲人が「かわらけ」を割って、迎え入れの儀式を行っている。このことを水合わせといい「水も漏らさぬ仲」の誓いを表している。今でも古い慣習を重んずる所では残っている。
これが終わると新婦は仏壇に案内され、この家の嫁になったことを報告する。家族として最初に結び合う最も大事な儀式とされている。そして新婦は几帳（新婦側から持参した家紋いりの暖簾）で囲まれた別室に移り、披露宴式までの間、出番を待っている。

◆披露宴式は新郎の家で

この後が愈々、披露宴式となる。今とは違い夕方の五時頃から始まり、最初に新郎、新婦がお酌に回って挨拶をする。ひな壇の真ん中で座りきりと言うわけにはいかないのである。
お酌を受けた人はお祝いの挨拶と謡曲を謡って祝意を表すしきたりがあり、自信のない人は扇子の裏に書かれた謡曲を見て謡った。謡曲の記された扇子があるのはこのためからである。曲を知らない人は、専門の熟練者が同席していて、後ろから声を合わせて貰うこともあるのだが、恥をかくというので、みんな謡曲のひと節を謡えるたしなみが常識だったと言う。
Ａさんは親に謡曲だけはしっかり覚えろと子供の頃から練習させられたのも、恥をかかせない親心だったのではと述懐している。金沢での謡曲が盛んなのは、こういう慣習によるのではと思われる。

◆朝まで続く宴席

新郎、新婦のお酌が済むと次に大盃と言われるくだけた宴席になる。一升の酒を並々と注いだ大盃が順番に回る。ちょっと口をつけただけで隣へ移そうものなら、「めでたい席で何事だ」と言われ、注ぎ足して飲まされる。時間が経つにつれ席は盛り上がり、中には新郎新婦の親戚同士で口論となり、外へ放り出されて頭を冷やす場面もあった。

宴会の時間は長く、朝方、空が白みはじめてお開きというのが普通だったと言う。

現在のような華やかさはないものの、近親者が一堂に会し、ひと晩をかけて祝い合う古き良き時代の慣習である。

結婚披露の翌日には「お茶」といい、近所の主婦たちを招いてご馳走をし、近所つきあいの顔合わせをするなど気を配っている。

結婚式は今はホテルが主流になっているが、当時は全て新郎の家で行われている。お色直しも余りなかった。結婚衣裳を作るのに金がかかり、現在のようにタキシード、ドレスなどの貸衣装がなかったからであろう。

◆新婚旅行は近くの温泉へ

結婚とセットになっている新婚旅行も、せいぜい２泊３日で加賀温泉か和倉温泉へ行っている。戦後の間もない頃に、和歌山県の白浜温泉や熱海温泉が新婚旅行のメッカとされ、そこで楽しむことの出来るのは豪華版と言われた。海外旅行などは夢のまた夢である。

こうした結婚儀式であるが、費用がかさみ、式をあげることが叶わぬ人もあった。いつの間にかお嫁さんが来ていたという話もあったことを添えておく。

◆新郎の婿帰り

さらにこの後も婚礼のしきたりが続く。結婚式を挙げた８カ月後、新郎の「婿帰り」の儀式がある。新婦が一緒に里帰りし、出産を控えての報告である。この日は結婚式に劣らないご馳走で新郎を歓待している。どんなに良い気分になっても新郎は新婦の実家で泊まることは許されなかったのである。

こうして結婚のあり方について、紙数を重ねたのは、失われつつある古くからの慣習を、美風として記録したいとの思いに駆られてのことである。

《年回り》

年回りは年齢によって吉凶があると言うことで、その年を迎える時は襟を正している。人生の大事な節目であって、これを受け止める慣習は少しは残っているが、今は余り気にしていないようだ。

◆厄年

男子は２５歳と４２歳。女子は１９歳と３３歳が厄年に当たる。特に男子は４２歳が大厄とされ、厄払いとしてその年の１月３日に氏神様へ参詣。紅白の餅と酒を供えてお祓いを受ける。この時は紋付、羽織、袴の正装で身も心も引き締めて参拝している。

１月中に、お供えした餅の半分を返して貰い、親戚や友人を招き「４２の餅の集い」を開き、餅を配り近所へも届けている。

これは親しい人に厄を担いで貰いたいとの願いが込められている。初老の儀式である。

女子には特に男子のような厄払いはないが、３３歳の大厄の年に、実家からお腰や帯を貰うしきたりがあった。

◆還暦

還暦は生まれた年の暦に戻るので、赤子に返るという意味で、家族や親戚から赤いチャンチャコをプレゼントされたり、自分で赤い毛布か布団を買ってきて寝る姿も見られた。

この後、古稀の７０歳になると「古来稀なり」と言って長寿を祝い、更に喜寿（７７歳）傘寿（８０歳）米寿（８８歳）卒寿（９０歳）白寿（９９歳）百寿（１００歳）と、おめでたい言葉を使って長生きの節目を祝っている。

この時には子や孫が主役で祝意を表している。３世代の絆を結ぶ美風であり、高齢社会の今日、大事にしていきたい事柄である。

《葬　儀》

誕生から結婚を経て長い人生を辿ってきた。いよいよ最終コーナーを迎えることになった。

人生最後の儀式である葬儀を結びに、この稿を終えることにする。

◆死の前兆

昔から人が亡くなる前に、サンマイ烏が泣くとかの話がある。家の屋根や電柱に一羽の烏が止まり、普通とは違う哀れな声で鳴くと言う。近所の家では聞こえるが、死人の家では聞こえない不思議な現象が伝えられている。

また死を直前にした人が、冬場に西瓜を食べたいとか、どこどこの水が飲みたいと言い、急いで求めに行っている間に亡くなっているとかの話がある。

◆次世界への旅立ち

死とは逝去の去っていくとか、昇天とも言われ次の世界への旅立ちの節目ではなかろうか。

死去すると、まず「死に水」といい唇を水で濡らし、読経の後、仏間に遺体を移し、頭を

北の方角にして寝かせ、短刀や鎌などの刃物を頭の右側に置く。悪い霊を寄せ付けない「おまじない」で、古来からの鎮魂の儀式である。

納棺の際には、遺体を清める意味で剃髪を行い、白足袋、白の帷子（かたびら）（裏地をつけない衣服）を着せる。この事を冥加（みょうが）すると言い、この装束を付けさせる人は縄帯をしめることになっている。男女とも同様で昭和３５年頃まで続いている。

◆遺体を清める湯灌（ゆかん）

今は病院で死去する場合が多く、遺体は病院で消毒されているが、以前は自宅で湯灌（ゆかん）という丸い木の盥桶（たらいおけ）にぬるま湯を張り、身内の人が「長い間、お世話になりました」と感謝の言葉を述べつつ体を清めている。湯灌を終えた後で、親戚や親しかった友人、知人に死亡の通知をしている。

江戸時代までは、湯灌のために寺の一隅に作られた小屋で行われており、地主のほかは自宅で行うことは出来なかったと言われている。

湯灌の後、冷酒に浸した剃刀で頭髪を剃り、死出の装いを整えている。

遺体はドライアイスのない時代であって、２４時間が経過すると、すぐ火葬できるよう準備が進められている。葬儀は友引に当たる日は避けられ、その場合、１日延びるため棺の周囲に油紙を敷き、臭いを防止する配慮がなされている。

◆葬儀は自宅で

通夜、葬儀とも格式や経費の関係で、寺で行われることは少なく、多くは自宅だった。近所の人達が葬儀に要する買い物から遺族の食事までも世話をしていた。隣近所の助け合いが身近に生かされていた。

通夜では親族は勿論、近所の人も、棺の前で眠らずに夜を徹して故人を偲んでいる。

文字通り通夜であって、僧侶の読経が終われば席を立つということはなく懇（ねんごろ）に営まれている。

香典返しには葬式饅頭と言われる包み一つが一般的だったと言う。また香典では薪一束とか米一升と記された大正時代の香典帳が残っている。

葬儀では喪主に続き女性が先に焼香し、その後、喪主と関係の近い男性が順番に行っている。何故、そうなのか分からないが、女性のＫさんは、確かに順番はそうだった記憶があると言う。

◆歩いて火葬場へ

出棺になると喪主は、白足袋に草鞋（わらじ）を履いて出るしきたりだった。昭和３０年代までは、霊柩車がなく、各村に火葬場があった。場所も近いこともあって、棺に棒を通して担ぎ、参列者は歩いて火葬場へ向かっている。この列には葬儀と異なり、女性は入ること

が禁じられている。

行列の中にいっぷう変わったものがあった。４本の青い竹の先に、奉書紙で作った提灯型の灯篭が下げられていて、４人が１本づつ持って列に加わっている。死出の旅で灯かりを掲げる先導の役割では、と理解されている。

火葬場は板で土壁を囲った簡易な作りで、真ん中に煉瓦の炉があり、その上に棺を置き火葬している。

燃料は現在のような重油ではなく木材が使われている。焼却に時間を要するので、いっぺんに燃え尽きないようにと生木を混ぜている。夜を通しての火葬で、火の見回りで夜中に火葬場へ足を運んで燃え具合を確認していたと言う。

千坂地域でも各村に火葬場が作られていたが、昭和３０年代に市営の斎場が整備されてからは姿を消している。その跡地には石で作られた地蔵、観音像が建てられているのを見ることができる。

薩

生業（なりわい）

千坂地域では古くから農業地帯として「なりわい」が営まれている。

そうした中にあって一時期ではあるが、赤煉瓦の生産、天然ガスの発掘、酒の醸造など産業面に取り組んだ足跡がある。

今はそれらの軌跡は跡形もなく消えているが、産業振興にかけた先人の努力を紹介する。

◆赤煉瓦を生産＝法光寺町

明治中期から昭和初期まで法光寺町地内に煉瓦工場があった。現在の旧ＮＴＴ宿舎、北鉄自動車整備工場にかけての広い範囲にあり、中村吉次郎氏が経営していた。煙突からはいつも黒い煙を吐き出し、当時の金沢では数少ない光景だったと言う。

煙突からの煙を見て、近所の子ども達は「中村レンガの煙突は、細くて長くて六角で、中から煙りがまっ黒ケノケ」と替え歌ではやされていた。煙りの状景や煙突の形までもが目に浮かんでくる。８０歳を越えたＹさんが、子どもの頃を思い出し、目をつぶりながら歌ってくれた。（それから間もなく逝去された。）

この煉瓦の製造には、当時の金沢市馬場６番丁出身の陶芸家・諏訪好武（蘇山）氏が指導している。

工場で生産されたレンガは、今の県立歴史博物館や石川近代文学館（旧第四高等学校）の一部に使われている。

千坂公民館主催で地域の歴史探訪に参加、工場跡を見学した陶芸家・鷹栖武雄氏（千田町在住）は、「煉瓦工場ができたのは工場跡の裏山から赤煉瓦に適した粘土が大量に確保されたこと、粘土の色（鉄分による弁ガラ色）と粘りの成分が化学分析の結果、難点のなかったことがあげられる。そのうえ形成品の自然乾燥の段階で、粘土の粘りで割れが生じなかった

からではと考察している。乾燥後は７００度から９００度の高度で焼成する工程があり、その燃料は薪、石炭、亜炭が使われるが、主燃料の石炭が確保されなくなったことで、生産が中止に追い込まれたのでは」とその見解を述べている。

この法光寺町の土壌は良質な赤煉瓦の生産に適したものであることを金沢市に置ける生産史の一コマとして残しておきたい。

寺町）

なお、参考として藩政時代には、この辺りで墨が作られていたという話が伝えられており、さらにこの近くにある熊野神社の奥で、戦時中の１９４２（昭和１７）年、１８年の短期間ではあるが、不足する燃料の補給にと泥炭を掘っていた場所があった。今は住宅が立ち並び、場所の推測さえ出来ぬくらいに跡形もなく消えている。

いずれにしても農村地帯の中にあって特異な生産が営まれた地域でもある。

◆天然ガスの発掘＝福久町、荒屋町

戦中を通じ昭和３０年頃まで、金沢市小坂町に天然ガス充填所を持つ加賀天然瓦斯興業株式会社があった。同社はガスの採取で、荒屋町、福久町から大場町、八田町にかけ、田んぼに穴を掘り、天然ガス（メタンガス）の発掘を行っていた。

掘削したガスを鉄のパイプで繋ぎ、水と一緒に小坂町の精製工場に送る仕組み。掘削地は大場町が殆どだったが、福久町、荒屋町にもあって、ここから金市町、横枕町を通り、百坂町で国道を越え神谷内町から小坂町へと通ずるガスの動脈が作られていた。

曲がりくねったコースになっているのは、架設の経費を省くため地盤の固い道路ふちを避け、土の柔らかい田んぼの中を選んだからだという。

同社は金沢市へのガス供給を行っていたが、増量が期待されない事情から閉鎖している。

イプ
館で保存）

閉鎖により敷設したパイプは放置されたままで、今でも福久町の田んぼの中から掘り出されることがある。先年、同町で発見された鉄管が公民館へ届けられ歴史の証しとして保存している。　あえなく消えていったガス発掘ではあったが、荒屋町のＫさんはガス搬送用に掘られた井戸を一つ買い取り、１０数年前までは灌漑用に使用、せめてもの名残りにとその井戸跡を残している。

また、福久町の河北潟に近い田では、棒を地中に差すと、発掘の思いを覗かせるかのように、ぶくぶくとガスの泡が吹き出してくるという。千坂地域に残るガス物語である。

◆酒の醸造＝百坂町

百坂町では随所にモッコリ井戸の水が湧き、水に恵まれていた。この恩恵を生かそうと大正中頃から１９３５（昭和１０）年頃まで、同地内で酒の醸造が行われ「百々泉」の銘柄で売り出されていた。

水量が豊かで水質が優れていることに着目、地元の有志が出資して会社を設立したのだが、

水量の低下で打撃を蒙（こうむ）り、経営を断念したと言う。現在は畑と一部住宅が建ち、当時のことを知る人は少なくなっている。

（注）千田遺跡及び「加賀獅子」の復活を果した千木獅子舞保存会の活躍の記述を除き、千坂公民館５０周年記念誌より転載